

Ⅲ 奈良盆地の環濠集落

1. 地図に見る盆地内の環濠集落

環濠集落の研究は、そのほとんどが奈良盆地の環濠集落を調査対象としてきた。そうした状況のなかで、奈良盆地にはいったいどれだけの環濠集落が存在するか、あるいはかつて存在したかを検討した論考も数多い。いま手元にあるこれら先学の論考を見てみると、大和に存在する環濠集落の実態が理解されよう。奈良盆地の環濠集落の実数を最初に上げた堀井甚一郎は当時の調査で環濠の存在する集落は84カ所としている（文献26）。また野村傳四氏は現地調査とともに古地図等を参考に、160カ所以上の環濠集落が存在したとしている（文献19）。戦後、奈良盆地の環濠集落の研究を行った堀部（秋山）日出夫氏は、184カ所を上げ、また、盆地内の環濠集落分布図を作成された（文献28）。これらの数と分布図は現在でも必ず引用されるものである。このあと、新たにその実数を示した研究は村田修三氏によるもので243カ所がある（文献31）。

このように奈良盆地の多くの集落に環濠が存在したのであるが、現存するものも含め著名なものを地図を参考にここで紹介しておく。

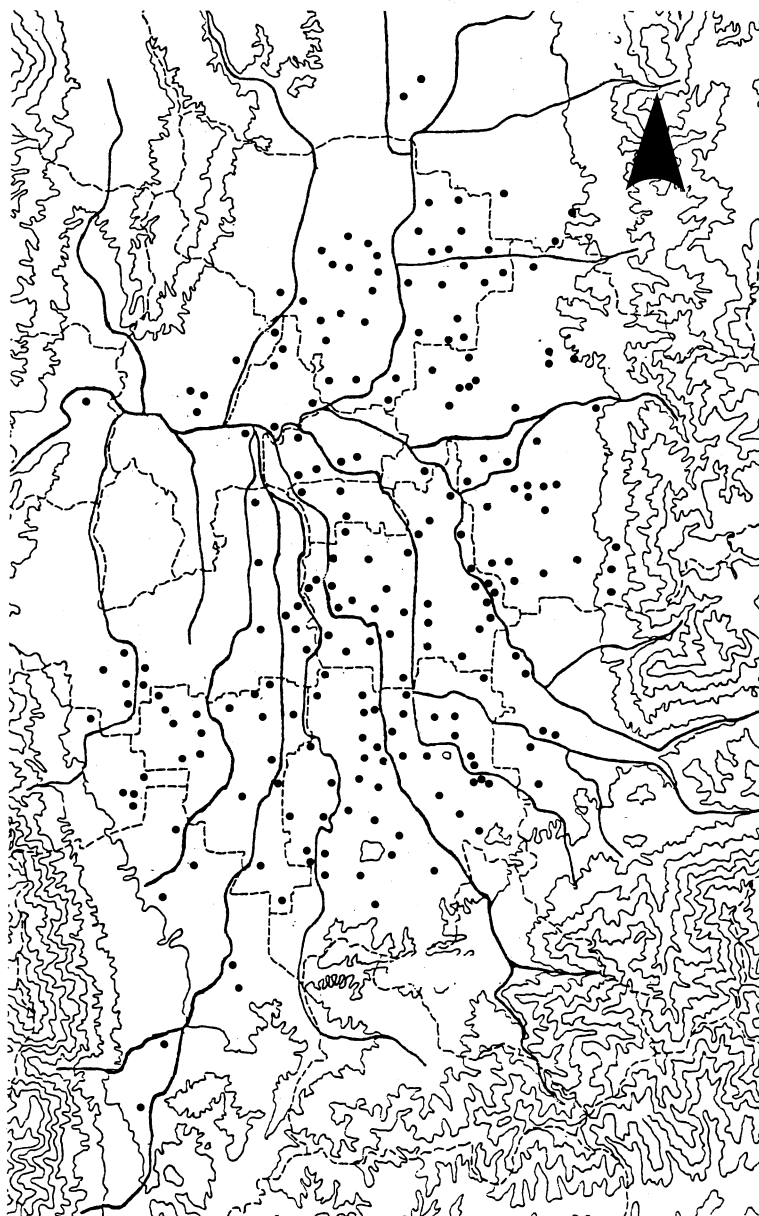


図13 奈良盆地の環濠集落分布図（文献31の環濠一覧より作成）

唐院環濠（川西町唐院）

磯城郡川西町、島の山古墳西側にある唐院町は、現在ではかなり大きな町となっているが、二重環濠の痕跡を残す中世の環濠集落である。

今は水田となっているが、字城の内には濠がめぐり、ここがかつての環濠屋敷地であったことがわかる。現在は集落を東西に貫く道路沿いに宅地が広がり、付近の様子もかなり変化しているようだが、東西道をはさんで南半部と北西部に外濠の名残をとどめる。

『箕輪寺再興之縁起』によると、永享二年（1430）に筒井氏と箸尾氏との合戦で箸尾氏にくみし、唐院庄が焼き払われている。また、『大和国郷土記』には唐院山城の記載が見え、集落北東にひかえる島の山古墳をこもり城として活用したことが推定されている。（参考文献 10）



図14 唐院環濠（S：1／5,000、文献17より引用）

上窪田環濠（生駒郡安堵町窪田）

上窪田環濠は、二重濠複郭として典型的な形をとどめている環濠として著名である。これは単に環濠集落と呼ぶよりもむしろ、居館あるいは平城の色彩の濃い領主屋敷を中心とした集落というべきだろう。すなわち、二重の濠に囲まれた北側の区画を領主屋敷（環濠屋敷）、その南側の部分が濠に囲まれた集落部分となる。

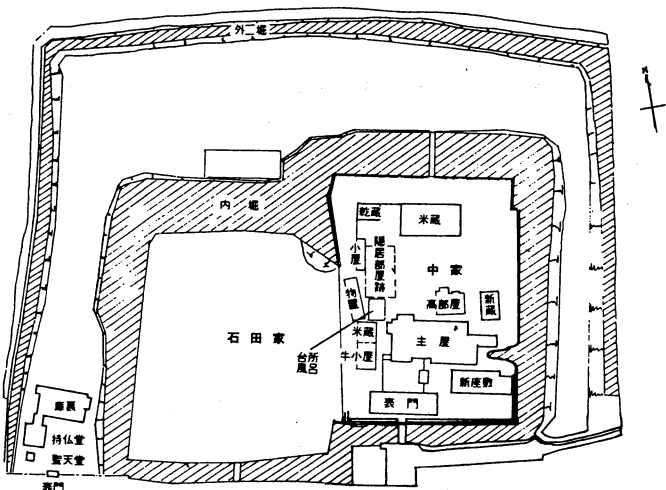


図15 環濠屋敷平面図（文献1より引用）

在地領主の存在を明確に示した典型的な環濠集落と言えよう。(参考文献 1、10、19)

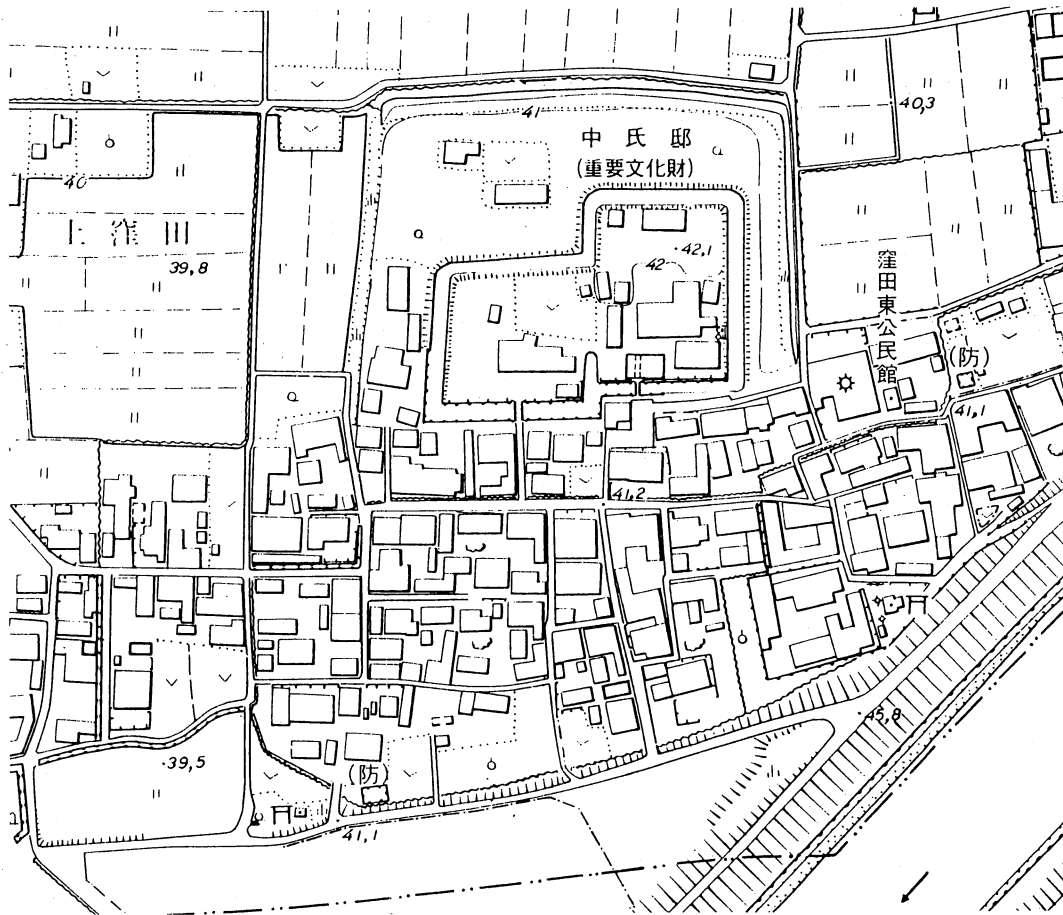


図16 上窪田環濠 (S: 1/2,500)

伴堂環濠（磯城郡三宅町）

環濠集落も有力領主の居住地となると、かなり複雑な構造をもつようになる。伴堂環濠集落もそうしたもののひとつである。環濠の形態は、南北に長い長方形で北西と南東にやや張り出す濠を巡らせている。環濠内は五つの垣内からなり、かつてはそれぞれの垣内を区画する枝濠も存在した。

中世の伴堂については、『続南行雑録』に永祿五年（1562）伴堂、金剛寺両城が破却されたことが記載され、また、『多聞院日記』や『国民郷土記』にも伴堂城の記載がある。

なお、伴堂氏は筒井氏に属していた。（参考文献 29）

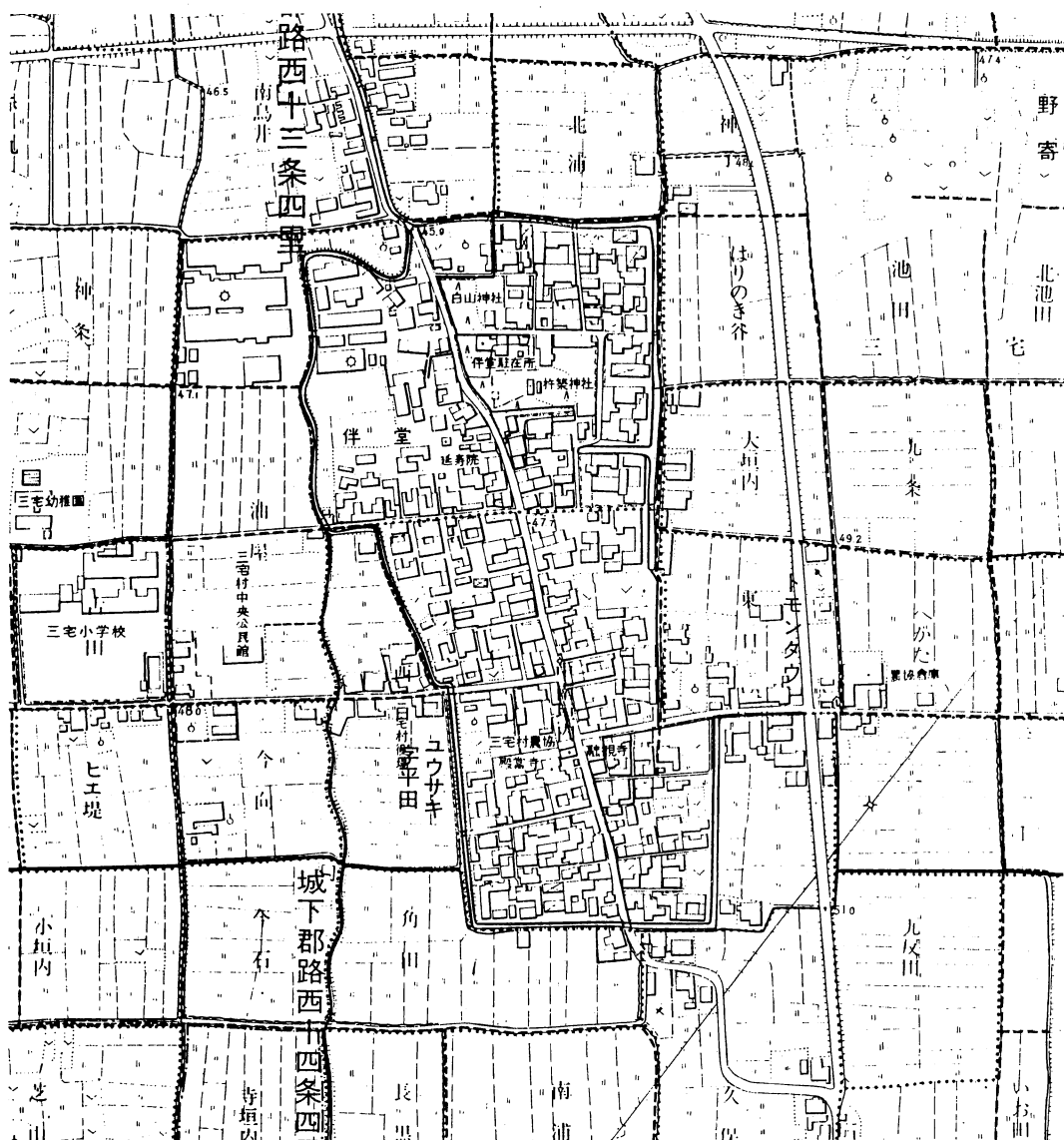


図17 伴堂環濠（S：1／5,000文献17より引用）

備前環濠（天理市備前）

備前環濠は現在、その濠はほとんど消滅してしまったが、近世における環濠集落の変遷過程を知るうえで貴重な資料である、江戸時代の地図3枚が残されている。約50年ごとに作成されたこれらの地図から、集落内の枝濠がこの150年の間に、かなり頻繁に開削、あるいは埋設されていることがわかるのである。

（参考文献 14）

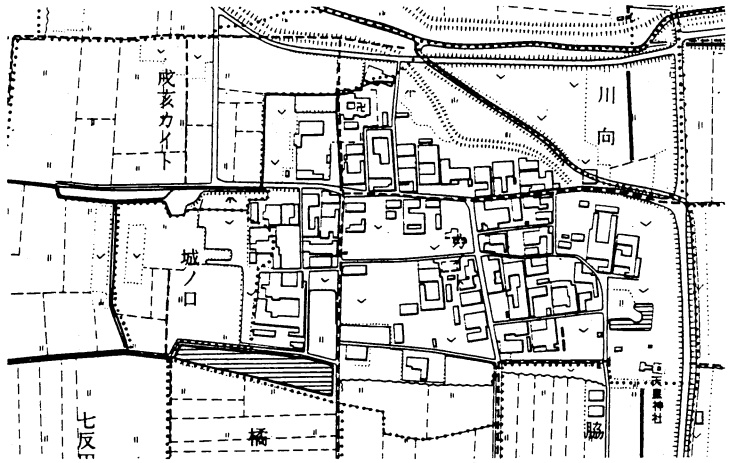
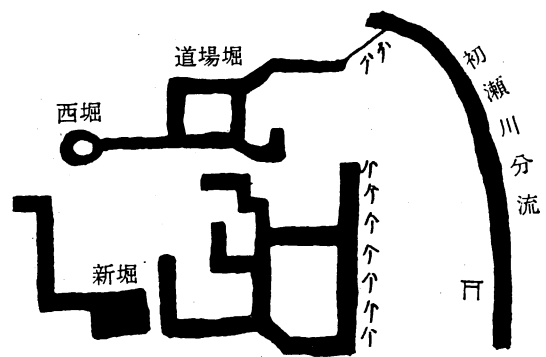


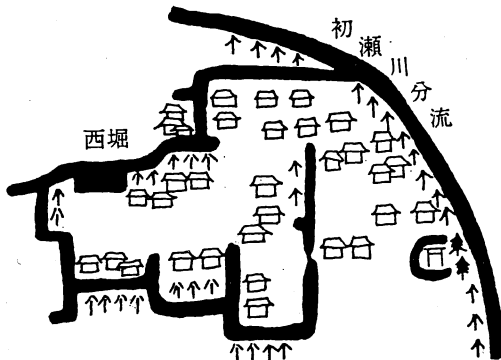
図18 備前環濠（S：1／5,000文献17より引用）



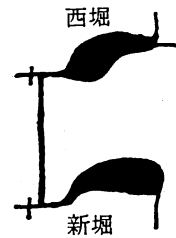
享保四年（1719）



宝歴十二年（1762）西堀・新堀を開削



文政九年（1826）西堀新堀がつながる



昭和五十年（1975）西堀新堀が残る

図19 備前環濠の変遷（文献14より引用）

保津環濠（磯城郡田原本町保津）

保津環濠は、稗田環濠とともに最も整った環濠を今に残す典型的な環濠集落である。現在の戸数は約40戸で稗田に比べ約半数である。そのうち25戸が環濠の中にある。完存する四周の環濠に二町四方の正方形に近い形で、南に神社（式内社：鏡作伊多神社）が突き出す。元禄十七年（1704）の古地図を見ると、現在の環濠とそれほど差のないことがわかる。さらに、この地図によると、集落への入り口は集落の北を通る街道筋ではなく、集落の南側と西側のあったことが指摘されている。しかも、この西側の橋は、幅約30cmの板橋で、人ひとりやっと通ることのできるものであったらしく、本来の入り口は南側だけであった。

なお、この集落には宝暦四年（1754）におこなわれた堀浚えの資料が残されている。この資料によると、堀浚えには4日間が費され、のべ368人の人々が、作業に参加している。これらの作業は、平野藩の役人の指揮のもとにおこなわれ、作業に従事した人々も、藩内の各村々より集められている。ちなみにこの堀浚えに参加した村は、薬王寺・十六面・竹田・南方・佐味・飯高・万田・秦楽寺・九品寺・俵本・保津の11ヶ村であった。この資料は奈良盆地における、近世村落史を研究する

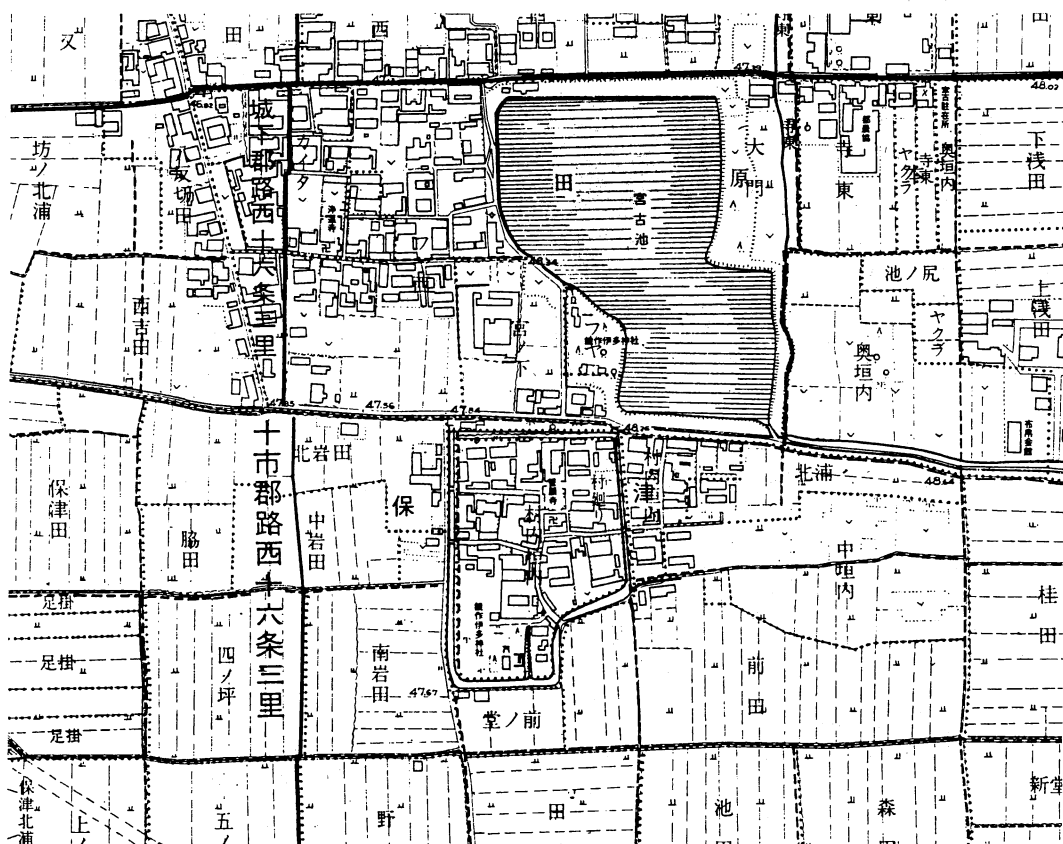


図20 保津環濠（S：1／5,000文献17より引用）

うえで、たいへん貴重なものである。

また、保津環濠集落の東側には小字名中垣内と呼ばれる場所があり、この地割りは他の耕作地が条里制の坪割に沿っているのに対し、大きく異なっている。伝承によると保津の集落はかつてはこの地にあり、穂積千軒とよばれていたということである。(参考文献 19、25、26、27、31)



図21 元禄十七年（1764）の保津環濠（文献19より引用）

北阪手環濠（磯城郡田原本町）

北阪手の集落は、寺川の東岸に所在し、東西約320m、南北約90mの長方形の環濠をもつ集落である。

濠は一部暗渠となっているが現在でも四周を巡り、特に南側の濠は幅が広く、この南側の濠だけで6本もの橋がかかっている。また、南側の濠内側には受堤と呼ばれる土塁があり、普段は通行のできるよう切り通しとなっているが、この切り通しの両側には、洪水時に水を食い止める板をはめこむ石柱を立て、せきの役割をはたしていた。現在でも6カ所にせきの跡が残されている。この受堤の内側にも細い濠が走る。

田原本は奈良盆地でも最も標高の低いところであり、洪水の被害の多い場所であるが、北阪手の集落では、このあたりは南側が最も低くなっており、大水の時の浸水を防ぐためこのような防御施設を設けているのである。

集落内には東西に1本の道が通り、この道を幹にして南北にそれぞれ枝道が出ている点、同じ長方形の環濠をもつ若槻の環濠集落と同様の道割である。（参考文献 25）

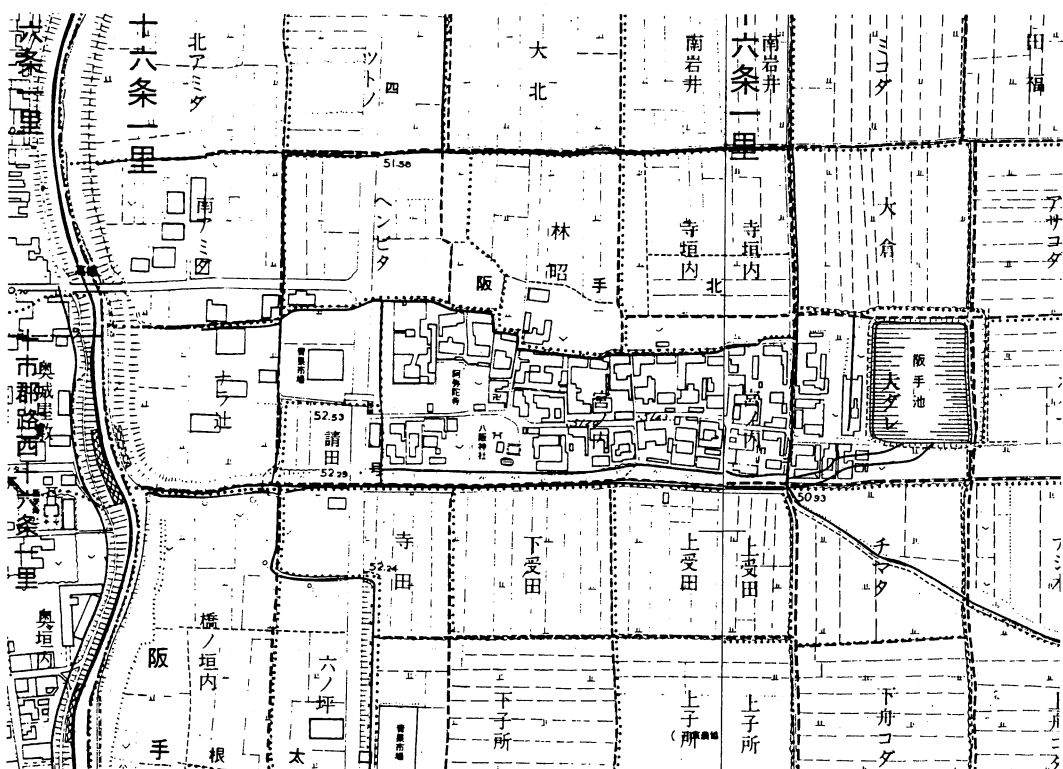


図22 北阪手環濠（S：1／5,000文献17より引用）

今井環濠（檀原市今井町）

今井町は、いまさら解説するまでもないほど著名な寺内町であるが、ここでは一般的な環濠集落との比較に注目して解説してみたい。

今井町は東西に長い長方形を成し、現在の戸数は約 800戸、一般的な環濠集落、例えば稗田環濠集落では約80戸程度であることと比較すると約10倍の規模となる。また、環濠の大きさでは東西約 600m、南北約300mで、同じく一般的な環濠集落で長方形の環濠をもつ若槻環濠集落と比較して面積で約8倍の大きさとなる。

集落内の道は延宝七年（1679）から元禄二年（1689）の間に描かれたとされている今井町古図によると、環濠の内側に沿って今井町を巡る道を除いて他は、かつてのものを踏襲しており、一般的な環濠集落のように遠方遮断や屈曲が多く取り入れられているものの、碁盤目状に通り、計画的な町割りが行われていたことがわかる。

史料から中近世の今井町の様子を窺うと「四町四方ニ堀ヲ掘り廻シ、土手ヲ築キ」との記載がありまた、本願寺が織田信長に降伏した際、「矢倉等ヲヲロサセ」と記されており、堺環濠都市に見られるような防御施設を備えた城郭都市であったようである。なおこの時期の「四町四方」は現在の町より狭く、その後東側に新町が作られ今の姿となった。その当時のようすは部分的に残る環濠と、春日神社の西の土塁に面影をとどめる。（参考文献 7、28、31）

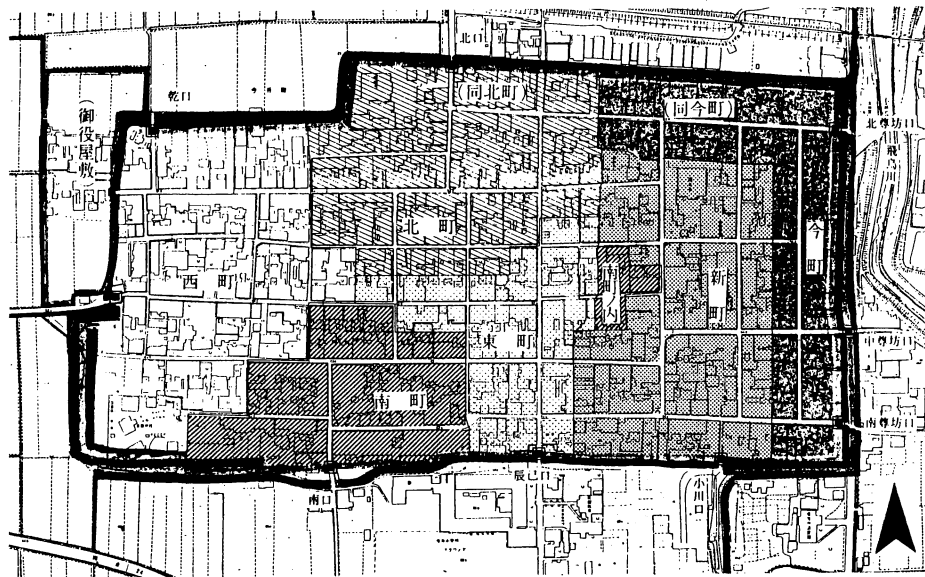


図23 江戸時代の今井環濠（文献7より引用）

南郷環濠（広陵町南郷）

南郷環濠も箸尾環濠に並ぶ奈良盆地内では最大規模の環濠（東西550m、南北700m）である。環濠内には現在2つの集落があり、また、南東隅には内環濠に囲まれた字「城ノ内」と呼ばれる区画が領主屋敷地跡と推定されている。この環濠は国人南郷氏の居城と考えられているが、南郷氏の動向についてはよくわからない。

南郷環濠集落のように有力領主の居住地として大規模な環濠をもつものに、先に上げた伴堂環濠集落とこの南郷の環濠集落、広陵町の箸尾集落、そして後述する大和郡山市の番条城、筒井城などがあるが、このうち筒井城を除く4つの環濠集落はそれぞれ南北に長い集落となっており、また、その領主館は集落の南端か北端に位置している。これは集落形成時に計画的な町割を行ったのでは

なく、その勢力の伸長と共に、周辺の集落を吸収合併させる形で集落地を拡大させた結果ではないかと考えられる。これらの集落は戦国時代の城下町としてその領主とともに発展していくのであるが、やがて大和が筒井氏によって統一され、戦国の時代が終わりを告げようとする時、これらの城下町の賑わいも止まり、やがてもとの集落にかえっていったのである。（参考文献 19、28、31）

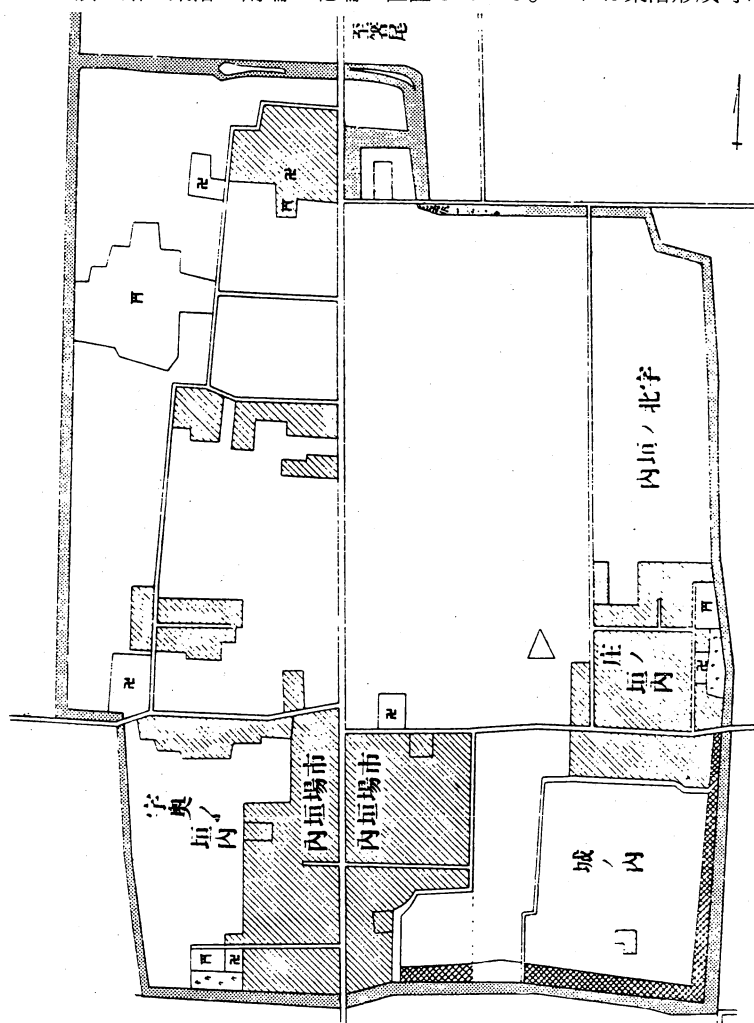


図24 昭和初期の南郷環濠（文献19より引用）

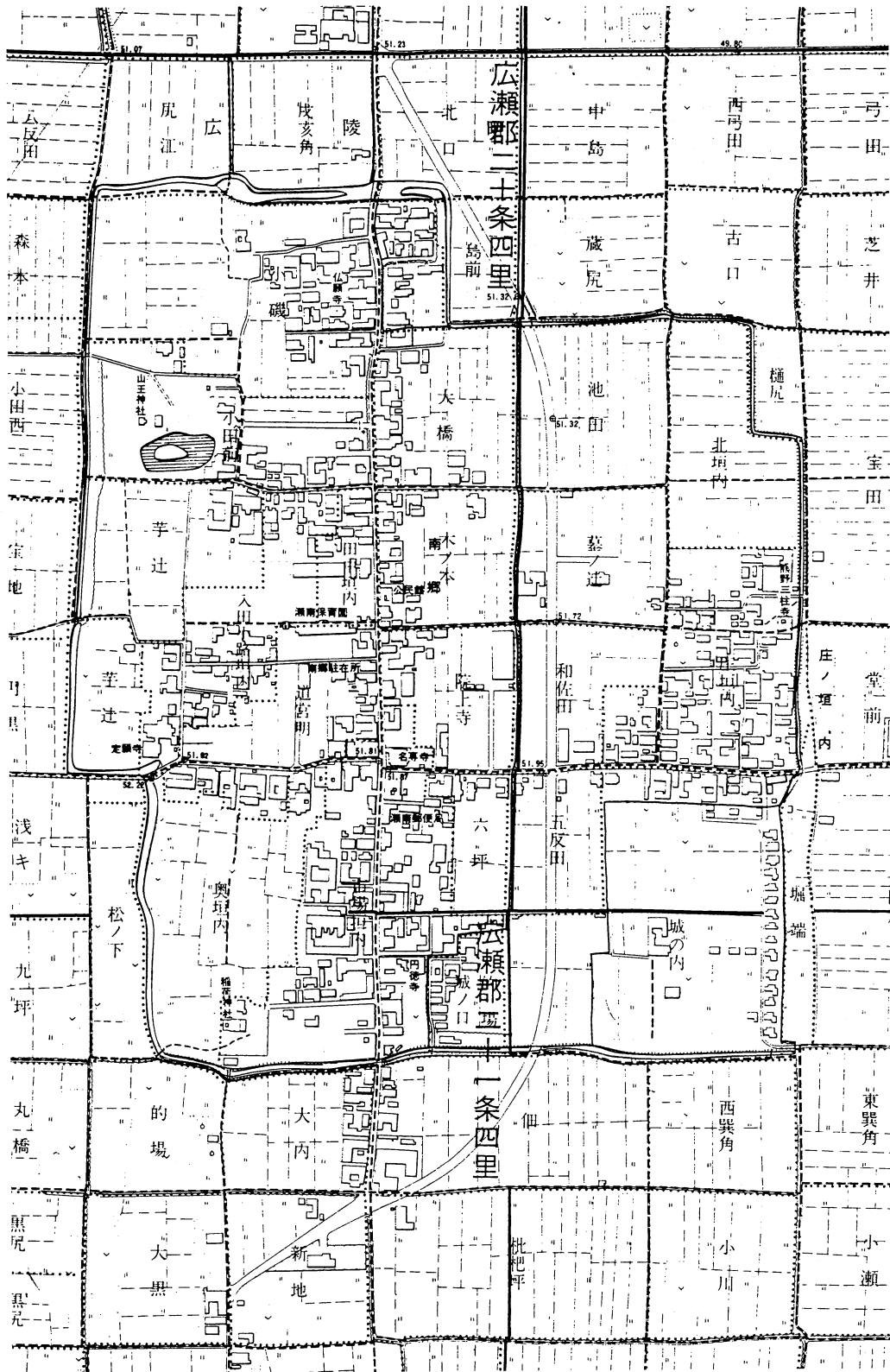


図25 南郷環濠 (S: 1/5,000文献17より引用)

この項では、現在も昔のまま残されている、著名な環濠集落について取り上げた。奈良盆地の各地に、このような環濠集落が存在し、また、その形態にもいろいろなものがあることが理解されたと思う。環濠の形態については堀部（秋山）日出男の分析があり（文献）ここに取り上げた集落をこの分類にあてはめると以下になる。

	分 類		該 当 す る 集 落
環濠集落	環濠垣内	環濠屋敷	唐 院 ・ 上 窪 田
		環濠の村落	備前・保津・上阪手
	寺 内 町		今 井
	城 下 町		伴 堂 ・ 南 郷

ただ、堀部氏の分類と筆者の区分とは若干意味合いが異なる部分があり、この点については、いづれ再論するつもりである。

2. 掘り出された環濠集落

近年、中近世の考古学が注目されてきた。奈良県でも中世の集落趾や城郭、墓地などの調査例が以前に比べかなり増加してきている。また、中・近世の発掘資料の増加とともに、この時代の研究が活発に行われるようになってきている。

こうした状況は、中近世史のあらゆる分野において少なからぬ影響を与えている。環濠集落についても、過去に埋没してしまったものが発掘される例も数多い。そして、それまで現存する環濠や、地表面に残された痕跡、また、古地図などによって推定復元されていたものも、地下に埋もれた環濠の検出によって、より確かなものとして復元されることとなった。これは単に、濠の復元に止まらず、中世環濠集落の復元、そして、そこに生活していた人々の復元をも可能にしている。それだけでなく、いままでその存在すら知られていなかった、歴史の中に消えた村々の姿をも浮かび上がらせるのである。このように、発掘調査によって文献では知ることのできなかった事実をあきらかにし、中近世の歴史研究は新たな段階を迎えようとしている。

この項では、そうした最近の研究成果を踏まえ、発掘調査によって明らかにされた知られざる環濠を紹介したい。



写真33 環濠を掘る

A. 古屋敷遺跡（大和郡山市満願寺町）

古屋敷遺跡は、大和郡山市西側、富雄川の東岸に所在する遺跡である。これまで3次の発掘調査が行われ、縄文時代後期・晩期の遺物や弥生時代の土壌、溝などが確認されている。

環壕と思われる溝は第2次、第3次調査の際、検出されている。この調査は大和中央道のバイパス道建設に伴うもので、道路予定地の北半分を橿原考古学研究所が、南半分を大和郡山市教育委員会が調査を実施、橿原考古学研究所調査地区を第2次、大和郡山市教育委員会調査地区を第3次調査としている。

溝はこの道路予定地に沿って検出された。検出された範囲は東西が約100mで、東端が北に屈曲していることが確認されている。溝の幅は調査地区外に溝が及ぶため、一部で確認されたに過ぎないが、確認された部分で約7mとなる。

溝内からは、土釜をはじめとして、陶磁器や甕、すり鉢、漆器などが出土している。また金泥を施した天正元年（1573）銘をもつ墓碑も出土している。これらの資料から、この溝の埋没年代は16世紀末から17世紀初頭であろうと考えられている。（参考文献 20）

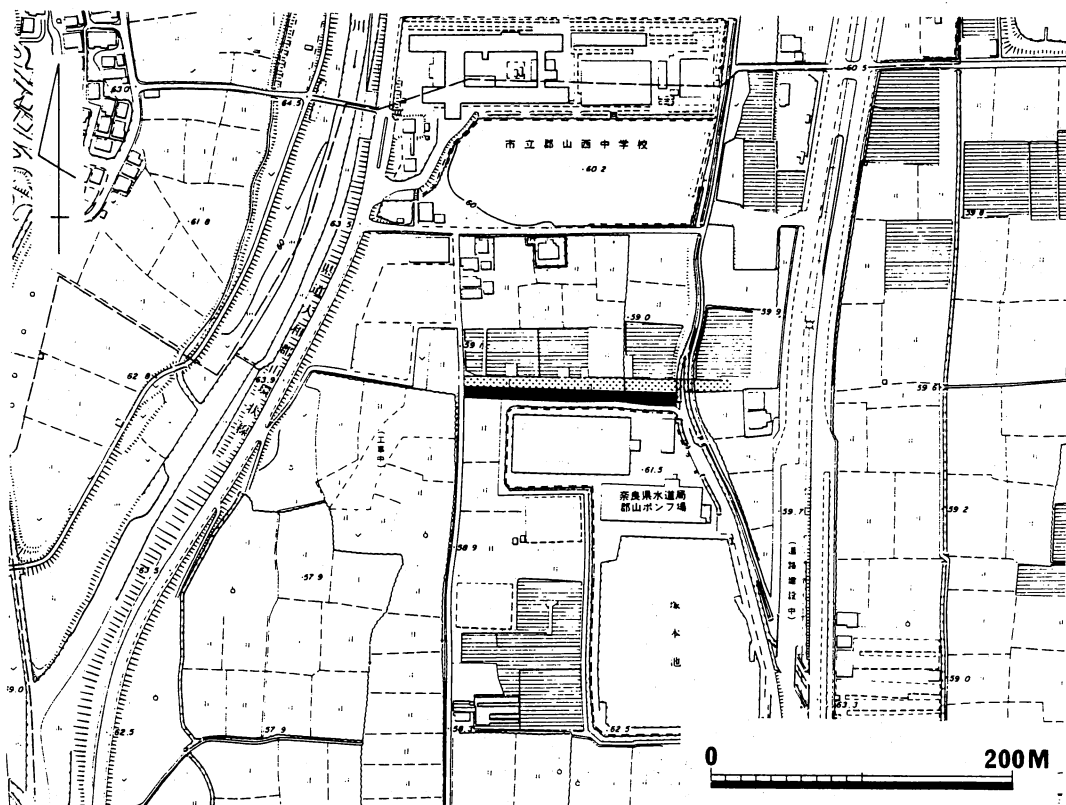


図26 古屋敷遺跡調査位置図（トーンは第2次、黒塗りは第3次調査地文献20より引用）

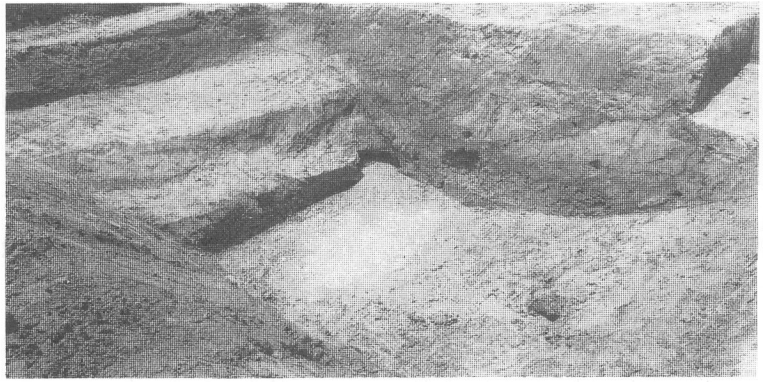


写真33 古屋敷遺跡第3次調査第4トレンチ検出の環濠

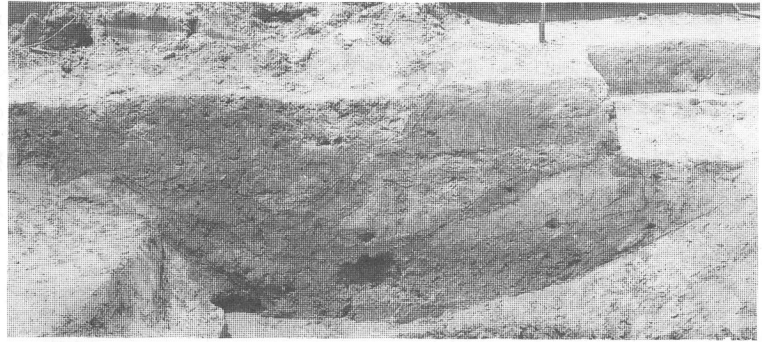


写真34 同第4トレンチ西壁環濠埋土堆積状況

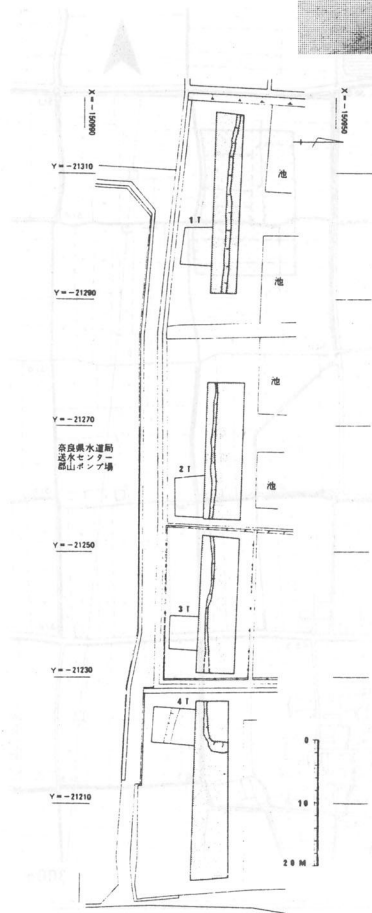


図27 古屋敷遺跡第2・3次調査トレンチ配置図(トーンは第2次白ヌキは第3次調査文献20より引用)

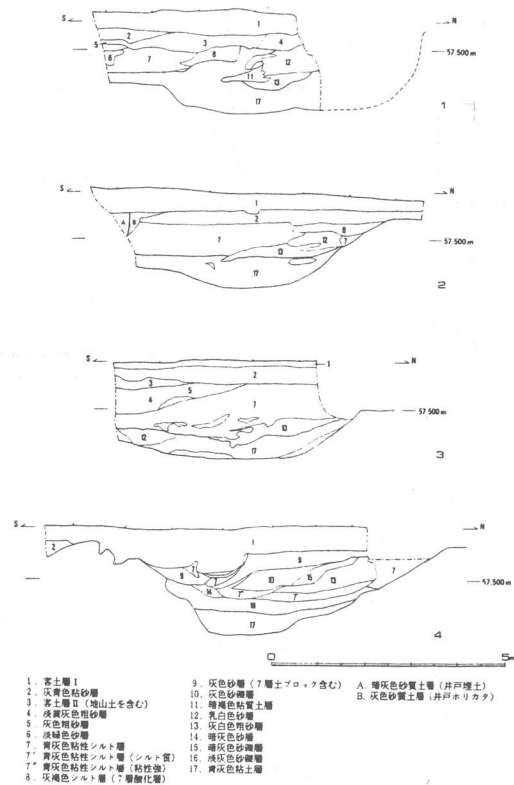


図28 第3次調査の各トレンチ土層断面図(文献20より引用)

B. 若槻庄関連遺跡第3次調査地（美濃庄遺跡範囲内、大和郡山市若槻町）

美濃庄遺跡は大和郡山市東半の佐保川の東、現在的美濃庄の集落を含む範囲に存在する遺跡で、西に隣接して稗田・若槻遺跡が存在する。調査報告では、若槻庄関連遺跡とされている。発掘調査は橿原考古学研究所によって1981年に実施された。

検出された遺構は中世のものではコの字状の溝と建物跡、井戸、池などがあった。また、それ以前の奈良時代の川、古墳時代前期の溝なども検出されている。

環濠と推定されるコの字状の溝は幅約3m、南辺が約25m、西辺約45mで北辺は調査地区外にまで伸びている。区画内には4棟の建物跡と48基の井戸、池跡が存在した。また、区画外にも1棟の建物が検出されている。この区画内の建物のうち、最も規模の大きいものは、区画のほぼ中心にある桁行四間、梁行三間の東西棟、南西隅が鍵状に欠け、西端が東端より狭くなる。また、この建物の南東隅に付属する施設が取り付けられている。この施設は、四隅を柱で支え、柱の間に杭状のものを数多く打ち込み、その床面は焼けていた。

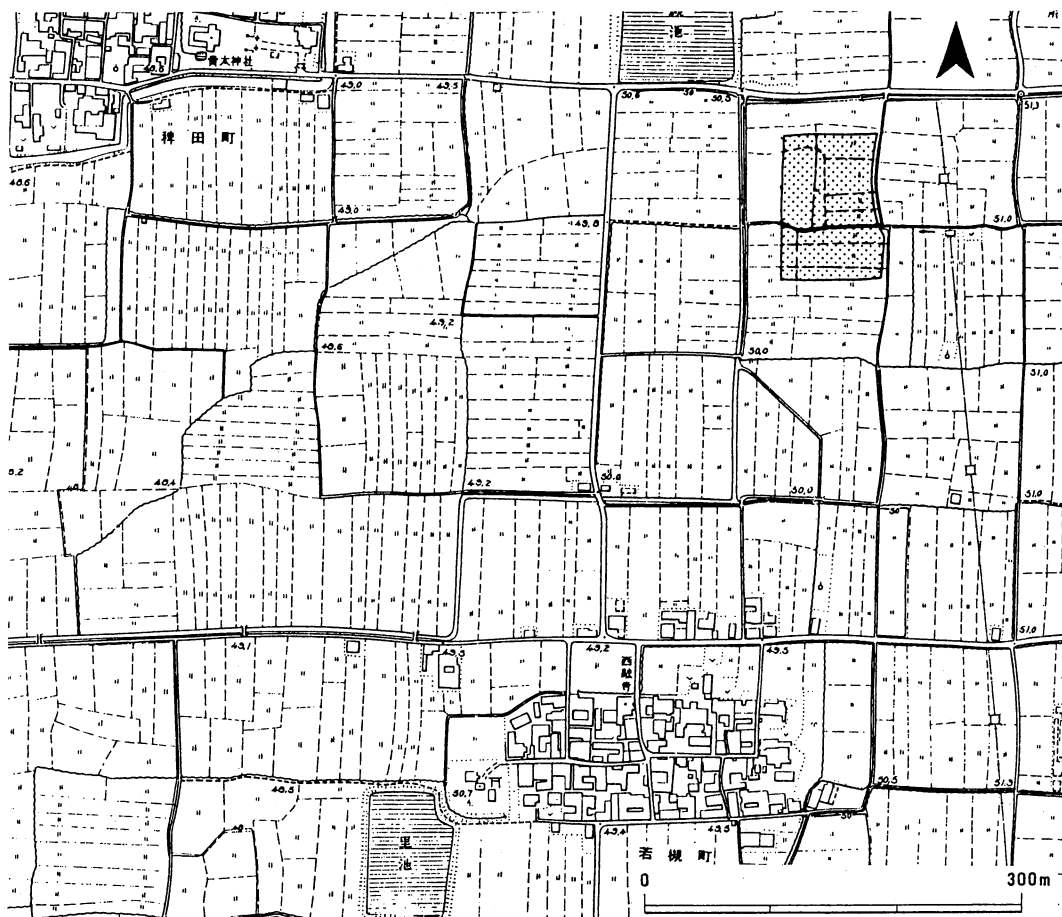


図29 若槻庄関連遺跡第3次調査位置図（S：1／5,000文献16より引用）

溝の埋土は3層に分けられ、上層は埋土、中層は地固めのための竹の切株を多く含む層、そして下層が自然堆積層である。遺物はこの下層より最も多く出土しており、土器・木器は西端のほぼ中央部に限られ、他からは、この溝に沿って植えられていた樹木の種子が出土している。また、鉾の出土も認められ、先に述べた主屋に付属する施設が工房のようなものであったとも考えられる。その反面、農耕具の出土は全く認められない。

若槻庄については、数多くの文献資料が残されており、この方面からの研究により、環濠集落形成以前の散村・疎塊村の形態についてもかなり詳細に考証されている。それらの研究成果によると、この時期の名主層の宅地が一反とされている。しかし、今回検出された、溝に区画された屋敷地は2500㎡と推定されており、2.5倍もの大きな隔たりがある。この点については、若槻庄地域における今後の調査成果を待って、解決しなければならないだろう。(参考文献 2、6、16)

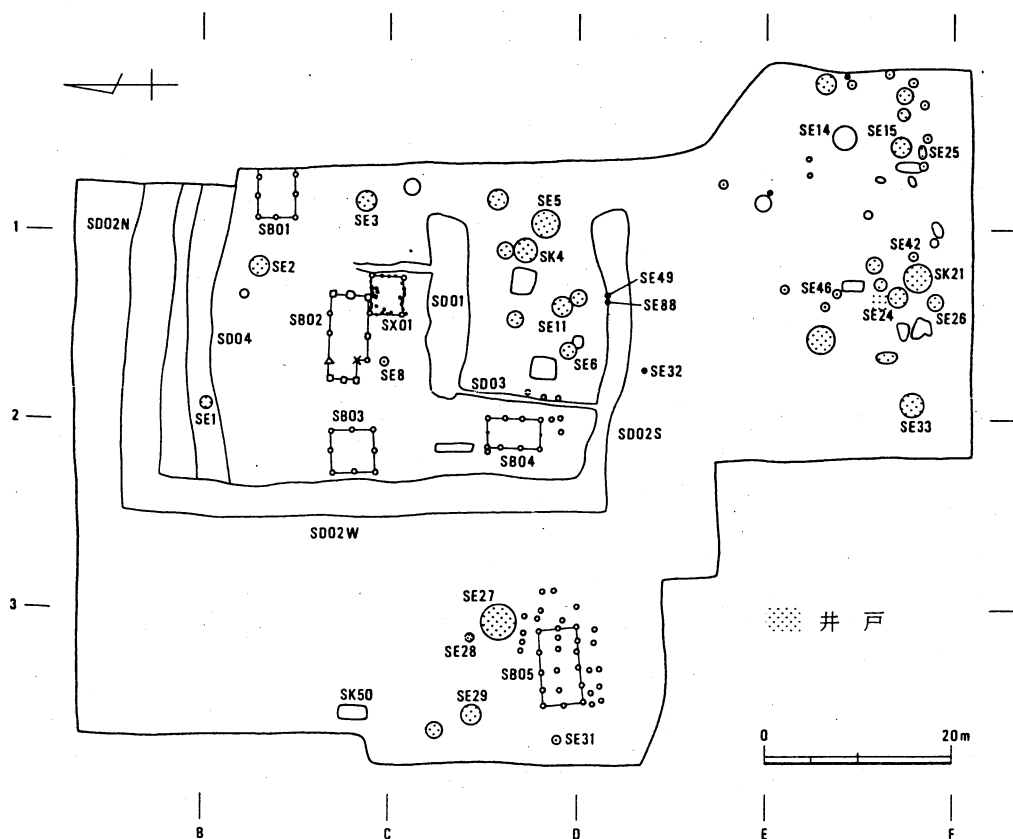


図30 若槻庄関連遺跡第3次調査検出遺構平面図 (S: 1/800文献16より引用)

C. 筒井城跡（大和郡山市筒井町）

筒井城跡では過去3度の発掘調査が実施されているが、それぞれの調査は面積的にもそれほど広くなく、筒井城の全体像を知るには至っていない。

第1次調査は橿原考古学研究所が1982年に実施したもので、字名「シロ」と呼ばれる、城の中心部と推定されている部分である。この調査では筒井城に関連する建物の柱穴や井戸、溝が検出された。また、筒井城造営あるいは改造に伴う整地の行われた痕跡が認められた。この調査は、試掘であったため筒井城の全容をうかがい知るためには調査面積があまりにも狭すぎた。しかし、この狭い面積にもかかわらず、かなりの遺構の検出を見たことは、この部分が城の中心部であった可能性の高さを示しているのである。

第2次調査以降は大和郡山市教育委員会によって実施されている。第2次調査は1988年に城の南東隅、字名「東門」地区で行われた。字名にもあるとおり城の東側に位置し、かつて門であった地域とも考えられたが、城と直接関連する時代の遺構は検出されず、筒井城築城時期よりややさかの

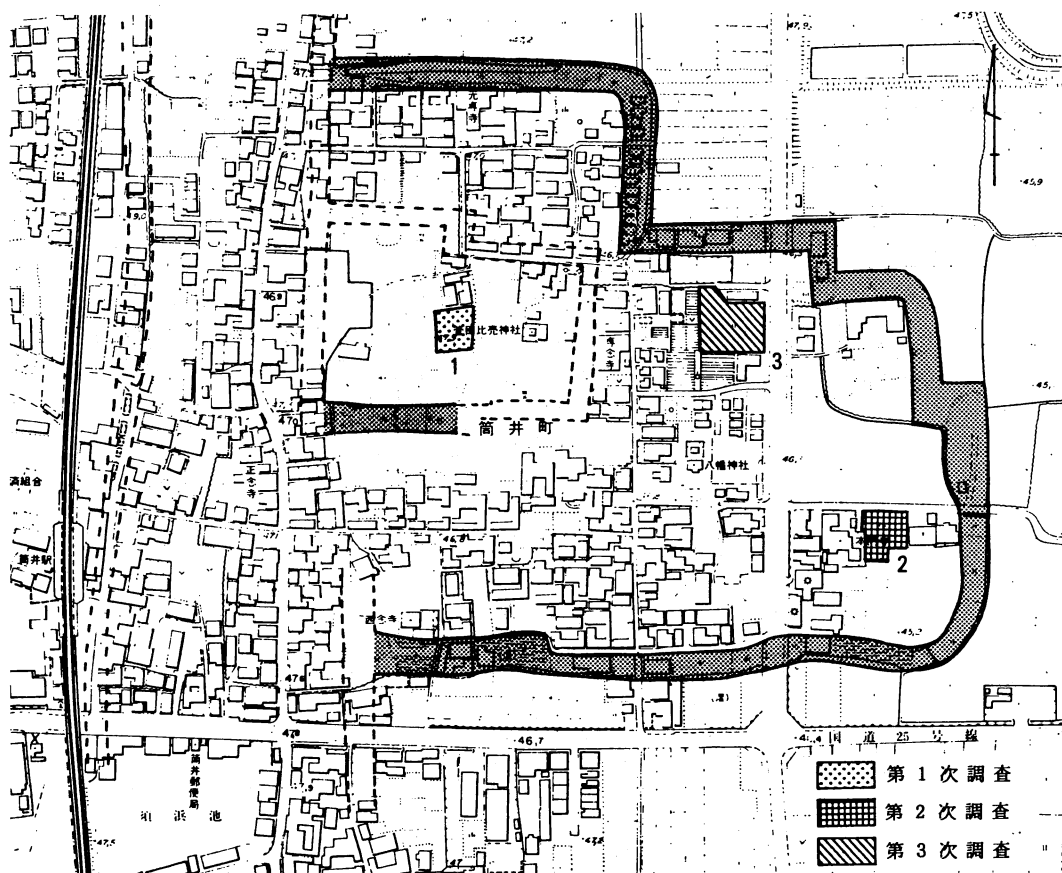


図31 筒井城跡調査位置図（S：1／5,000文献33より引用）

ばる14世紀を中心とした時期の井戸が17基も検出された。

第3次調査は1991年に、城の中央部から東にあたる字「森目」地区で実施された。この調査では井戸や土壇、ピット、溝などが検出された。井戸は筒井城の存在した時期に使用されていたもので、上部の井戸枠は抜き取られ丁寧に埋め戻されていた。そのほかの遺構は、筒井城に関連する建物跡と思われるが、そのことを積極的に示す礎石などは認められず、筒井氏の郡山城移転に伴いこれらの建物も移築されたものと考えられている。(参考文献 3、30、31)

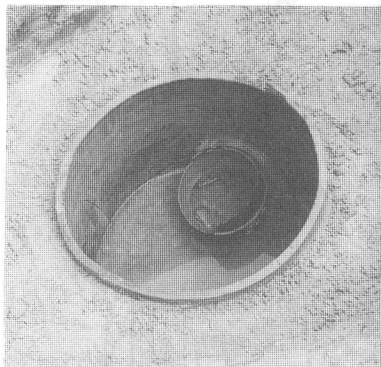


写真35 筒井城跡第3次調査検出の井戸

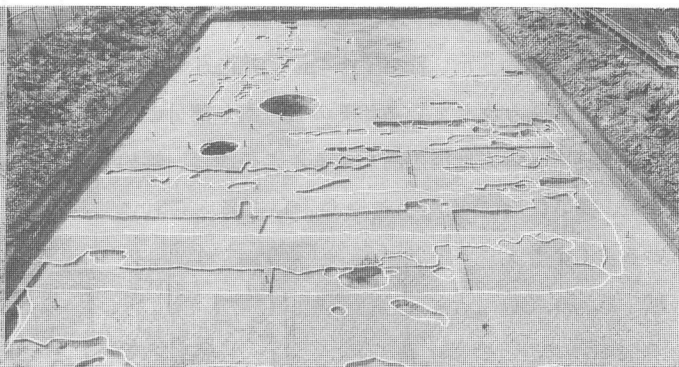


写真36 筒井城跡第3次調査区全景

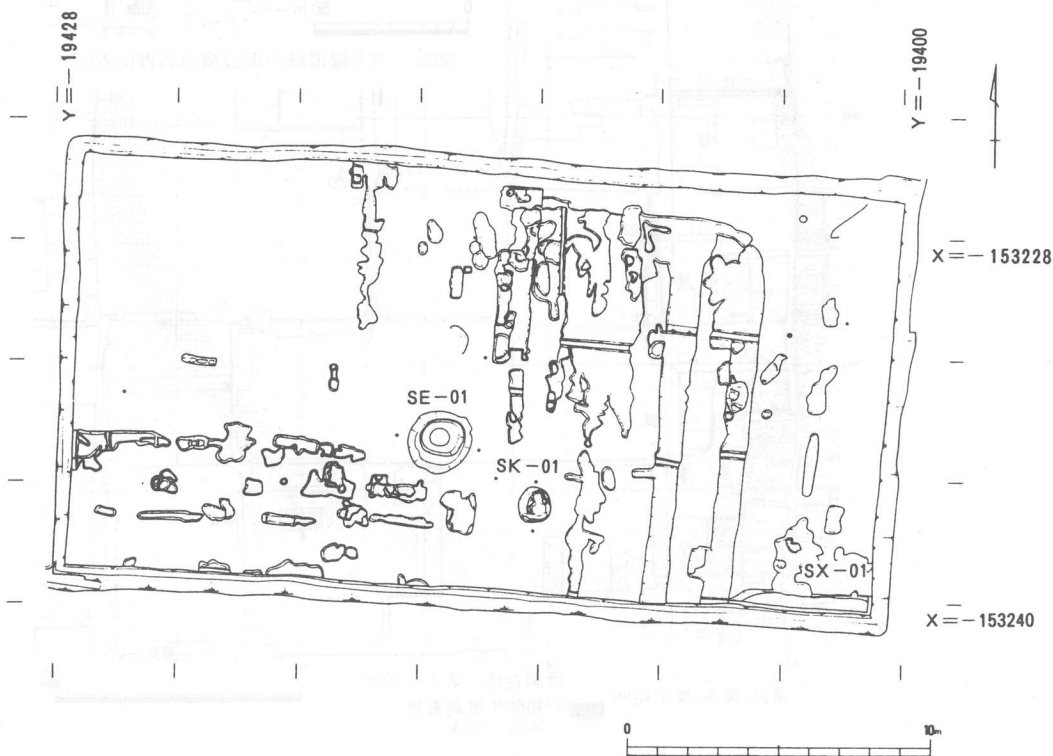


図32 筒井城跡第3次調査検出遺構平面図 (S: 1/250文献33より引用)

D. 唐古・鍵遺跡（磯城郡田原本町）

唐古・鍵遺跡は弥生時代の巨大集落遺跡として有名であるが、数十次を数える発掘調査のなかで中世の唐古集落の姿も徐々に明らかになりつつある。

唐古・鍵遺跡の発掘調査のうち8・11・14・16・19・20・22次の各調査で中世の遺構が検出されている。その主なものは、屋敷地を囲む環濠と思われる大溝、屋敷地内を区画する大溝、建物跡、井戸である。環濠は幅約6m、深さ約1.4mで南北方向の一部で東側に張り出している。その張り出し部分の西に一辺約30mの方形区画溝がある。この溝は、幅約4m、深さ0.7mで環濠よりやや古いと考えられている。（参考文献 2、20、21）

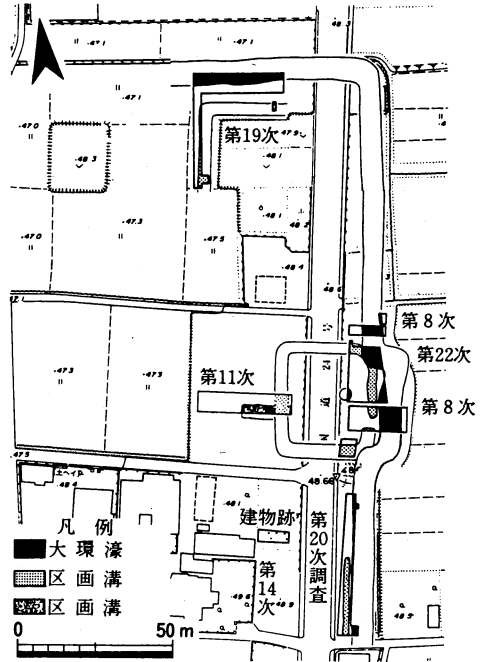


図33 唐古鍵遺跡の環濠検出調査位置図

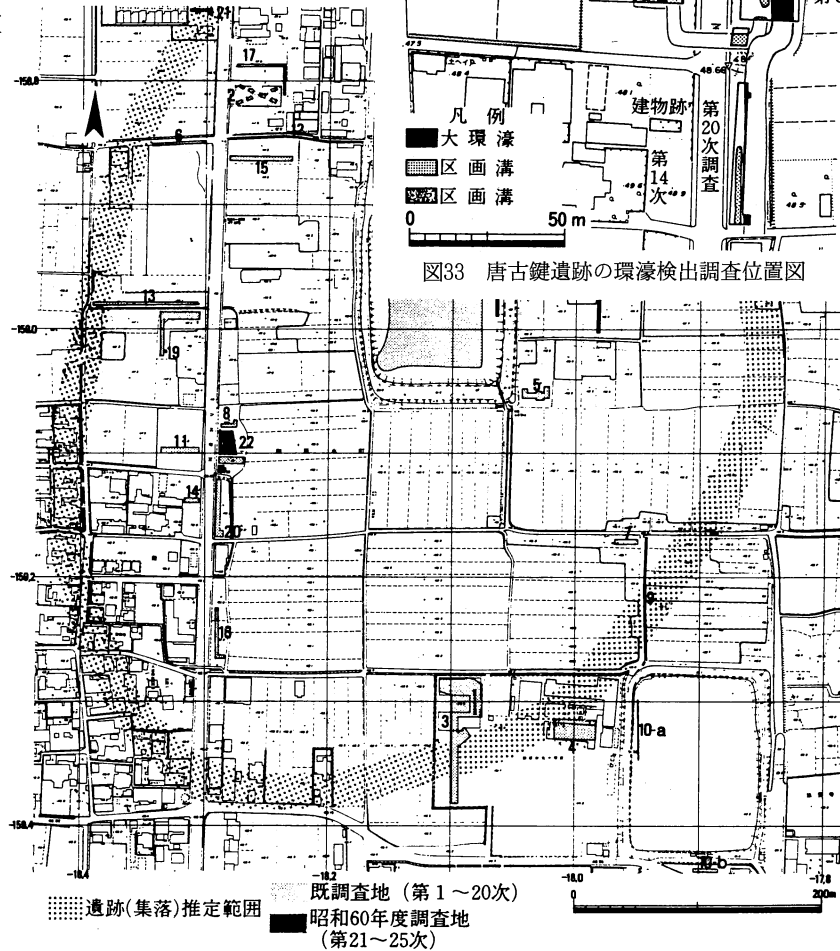


図34 唐古・鍵遺跡調査位置図（文献23より引用）

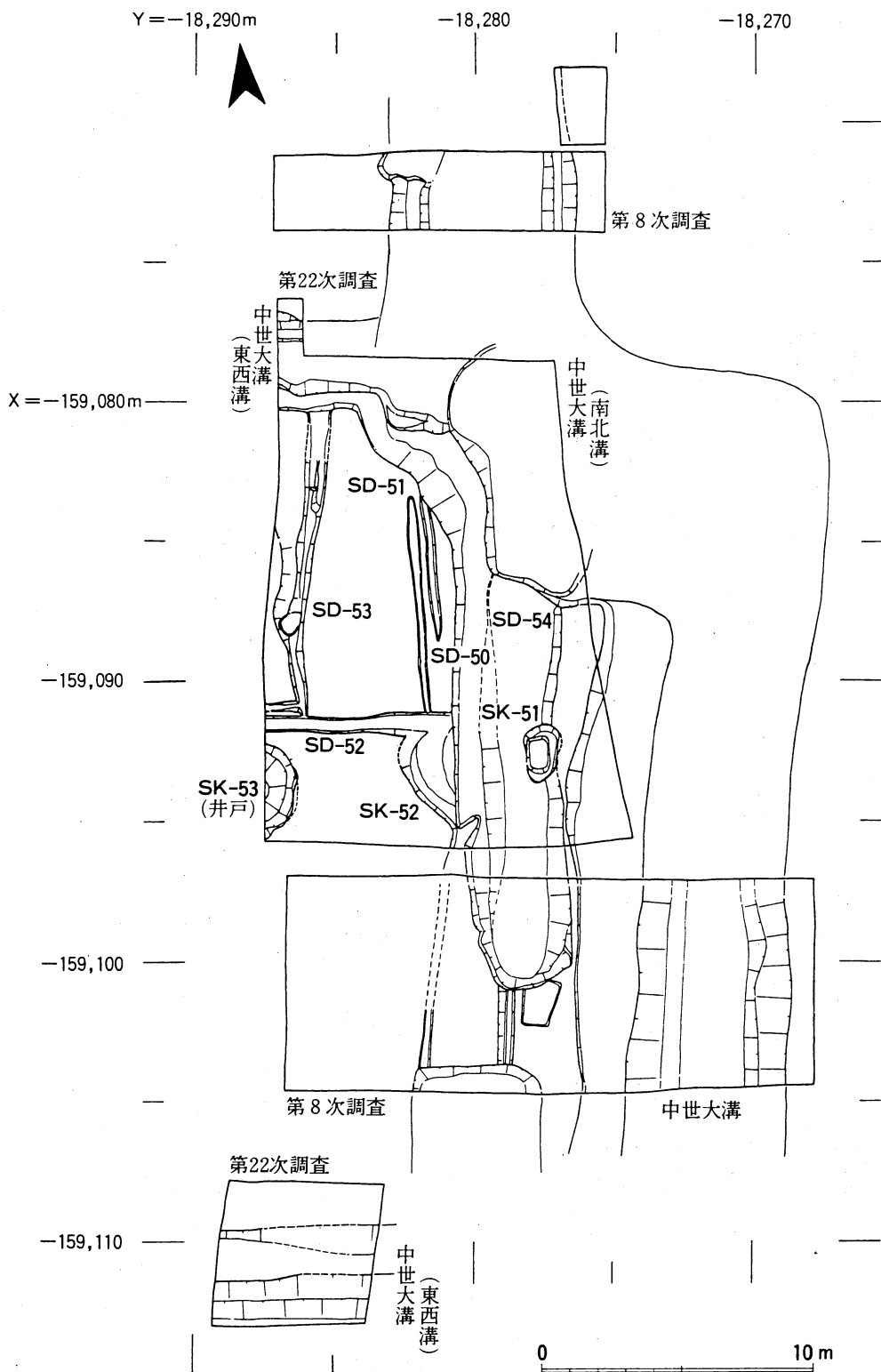


図35 唐古、鍵遺跡第8・22次調査検出遺構平面図（文献23より引用）

E. 金剛寺遺跡（磯城郡田原本町金剛寺）

金剛寺遺跡の発掘調査は、現在の金剛寺の集落内で実施され、調査面積も狭く、環濠と思われる溝の一部を確認したに過ぎないが、かつての金剛寺城の一端を知ることができた。また、環濠に架かる橋の跡も検出され、環濠にかかわる施設についての貴重な資料が示された。濠は、鉤型に交わり、推定幅は8 m、深さは1.4mである。橋は、濠の交わる部分より東にあり、橋脚が濠の北肩と中央部分で確認された。この橋脚の間隔から、橋の幅は1.5mとなる。（参考文献 22）

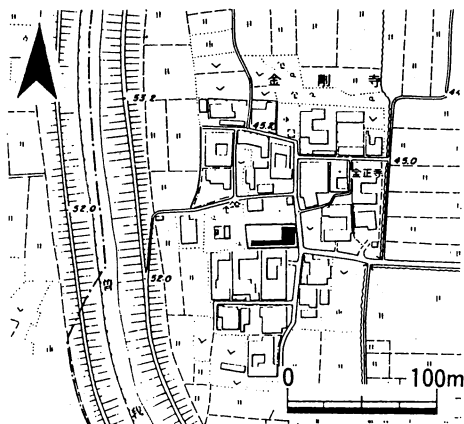


図36 金剛寺遺跡調査位置図（S：1／500）

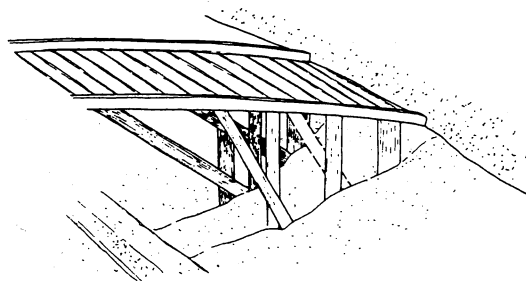


図37 金剛寺遺跡検出の橋梁復元図

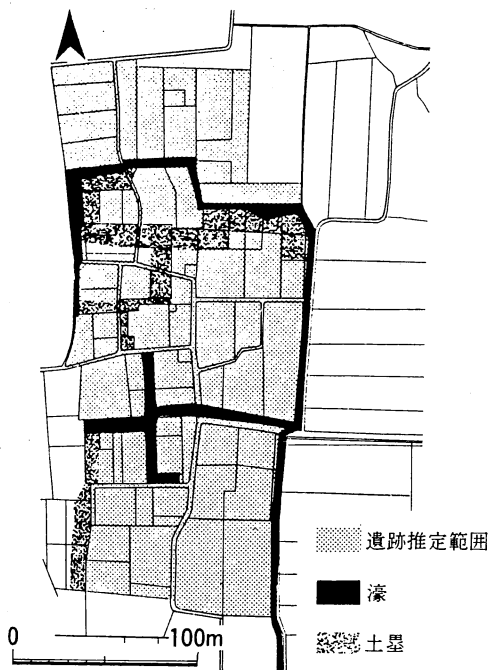
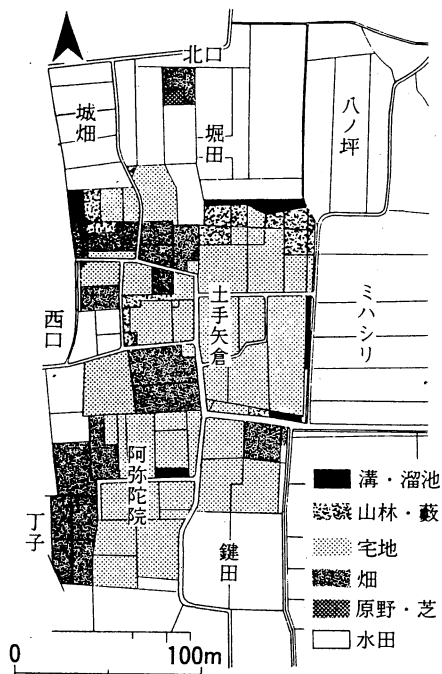


図38 金剛寺集落の地割、地目（左）と推定される環濠、土塁（右）（S：1／400）

（このページの図はすべて文献24より引用）

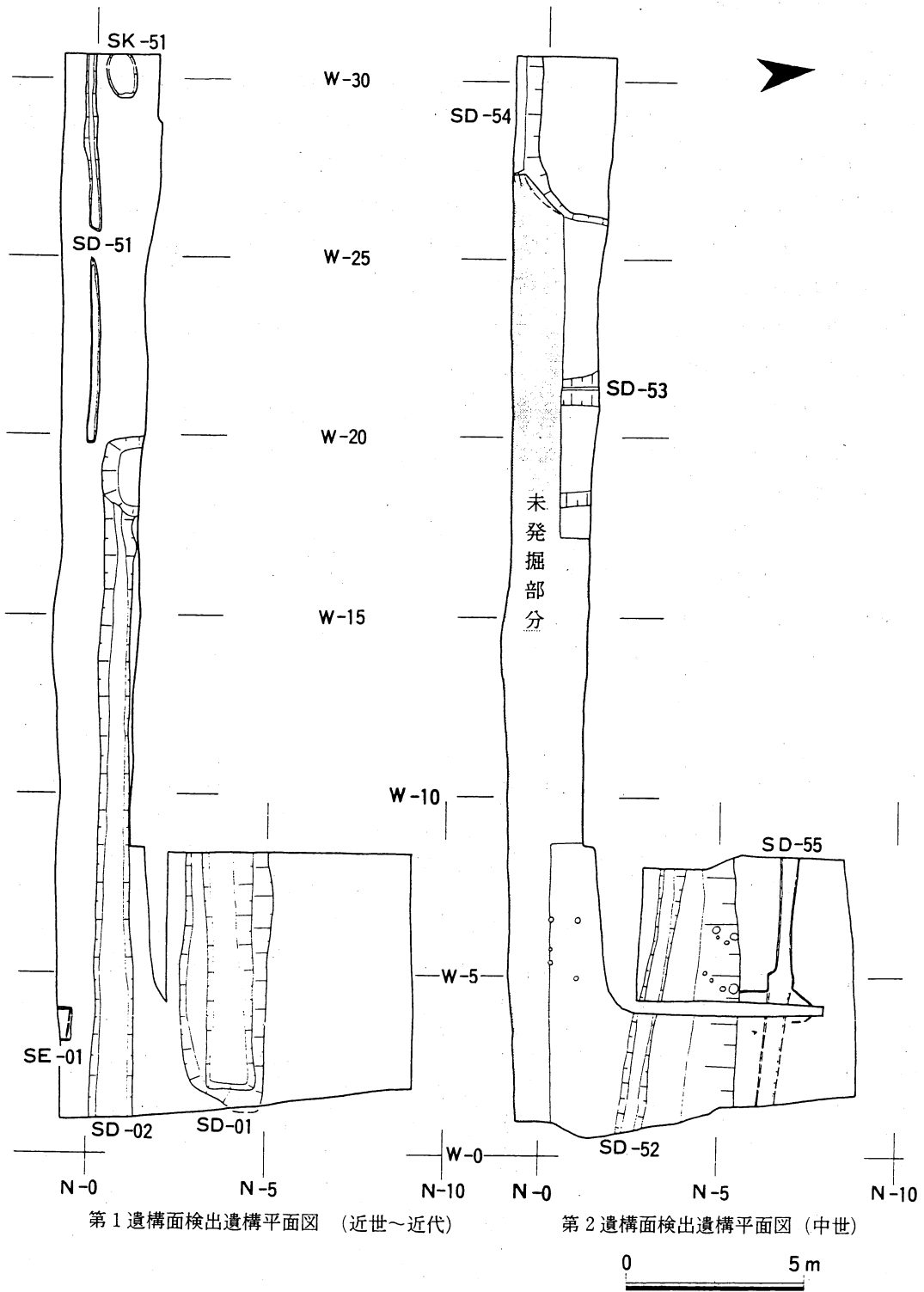


図39 金剛寺遺跡検出遺構平面図 (文献24より引用)

F. 法貴寺遺跡（磯城郡田原本町法貴寺）

1982年に、奈良を襲った大風水害は思わぬ置土産をわれわれに残して行った。法貴寺遺跡の発掘調査もそのひとつで、大和川災害復旧事業として初瀬川の水を直線的に流すための工事の事前調査で、橿原考古学研究所により1984年から1985年にかけて行われたものである。

法貴寺遺跡では、環濠をともなう屋敷地、寺、神社、耕作地が確認され、中世集落の構造を明らかにしえた奈良県下でも唯一の非常に貴重な発掘調査であった。屋敷地は、東側の濠を確認していないものの、四方に一重あるいは二重の濠を巡らせていた。濠に囲まれた土地は約2500㎡で若槻集落の北で確認された環濠屋敷地とほぼ同規模である。屋敷地内には10棟ほどの建物が建ち、その中で最大のものは桁行七間、梁行六間で南東隅が鍵手になるものである。屋敷地の北東側は耕作地として利用されていた。屋敷地の南の調査地では屋敷地とともに、法貴寺の子院と天満宮背面の空閑地を確認した。特に、神社背面の空閑地は、何らの施設の痕跡も見られず、集落形成時より今日までそのままであった。

以上の遺構の廃絶については、濠の埋没によってあきらかにされる。濠は14世紀中頃より順次埋没がはじまり、15世紀なかばで環濠屋敷地の北と南の2本の濠が埋没してしまう。したがって、環濠屋敷も15世紀前半には廃絶していただろうと考えられている。西の濠については、18世紀前半まで灌漑用の溝として残る。以後、この屋敷地には、建物の建てられることはなかった。（参考文献2、4、5）

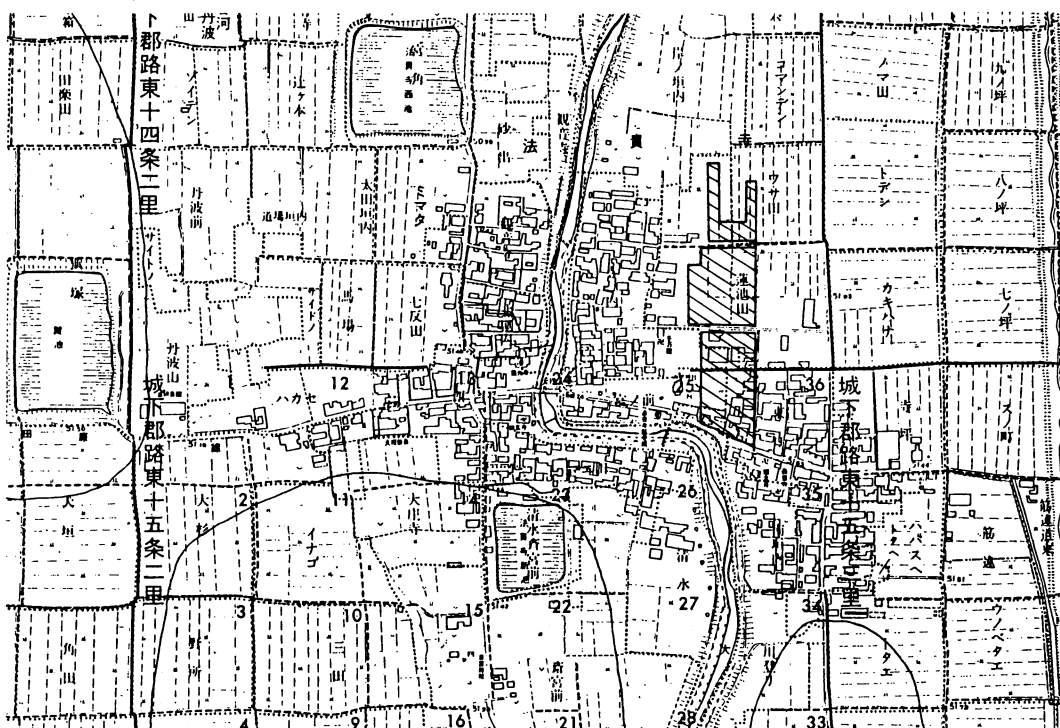


図40 法貴寺遺跡調査位置図（文献4より引用）

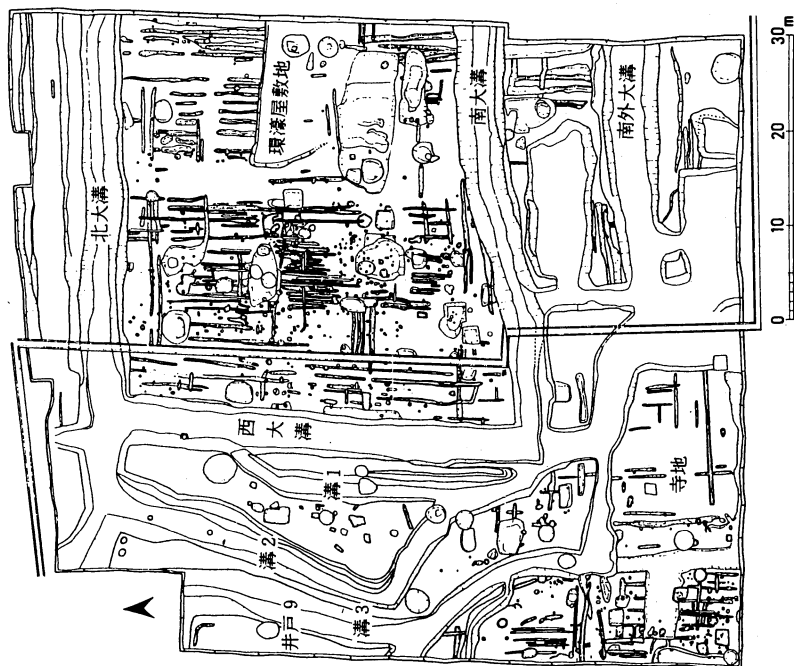
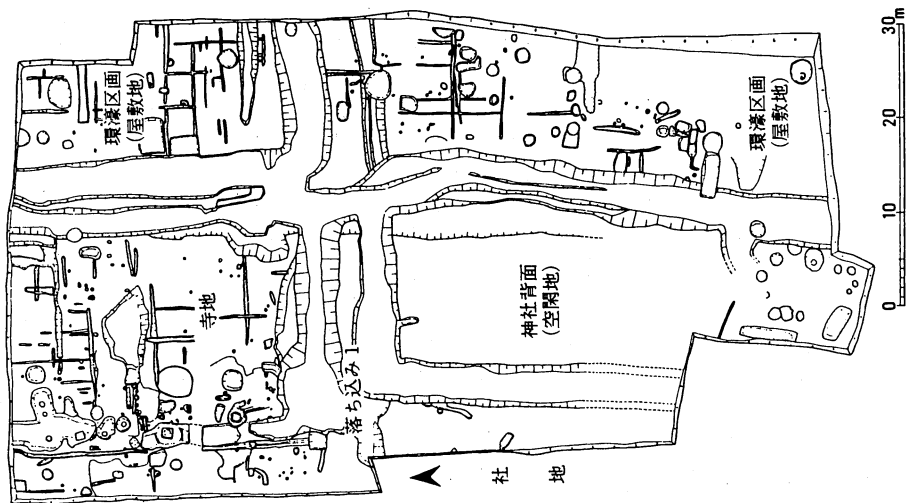


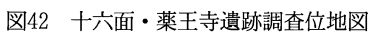
図41 法貴寺遺跡検出遺構平面図 (S: 1 / 800文献 5 より引用)

現在でも、環濠を残す葉王寺の集落と近世に保津集落より分村した十六面の集落のちょうど中間に位置する当遺跡は、国道24号線バイパス道建設工事に伴う1980年の試掘調査により、その存在が明らかとなった。発掘調査は1981年より1982年にかけて檀原考古学研究所により実施され、中近世

この調査によって中世の集落に係る大小の溝38本、井戸132基などが検出された。環濠及び環濠の中の屋敷地を巡る内濠は北第Ⅱ調査区、南第Ⅰ調査区で検出されている。環濠の幅は約4 m、深さ約1 m、内濠の幅は約6 m、深さ約2 mである。また、北Ⅰ区では、環濠集落形成に先行する屋敷を巡る濠が検出されている。

以上のような、集落の変遷、特に散村・疎塊村から集村へ、そして、環濠集落への変遷については、これまで歴史地理学の方面の研究から考証されていたが、この発掘調査によって始めて、考古学的な実証がなされたのである。そうした点からも十六面・薬王寺遺跡は、注目されるべき重要な遺跡であると言える。

(参考文献 6、30)



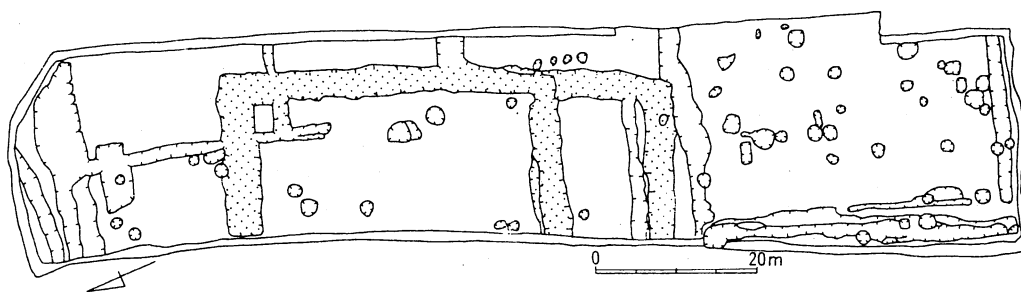


図43 十六面・薬王寺遺跡北Ⅰ調査区検出遺構平面図（トーンは屋敷を巡る環濠）

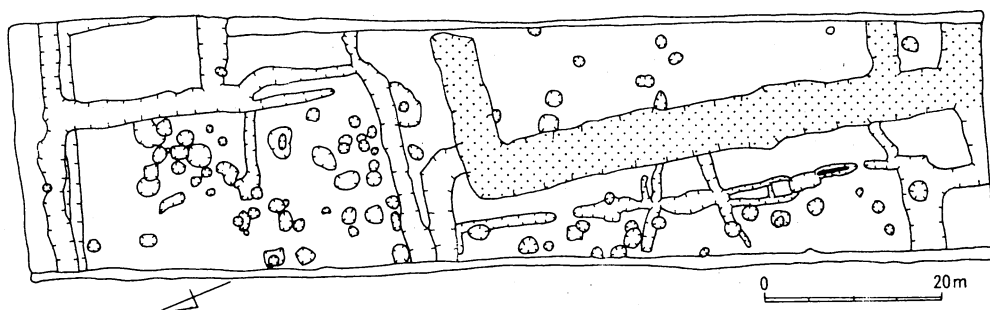


図44 十六面・薬王寺遺跡北Ⅱ調査区検出遺構平面図（トーンは環濠内の屋敷地区画濠）

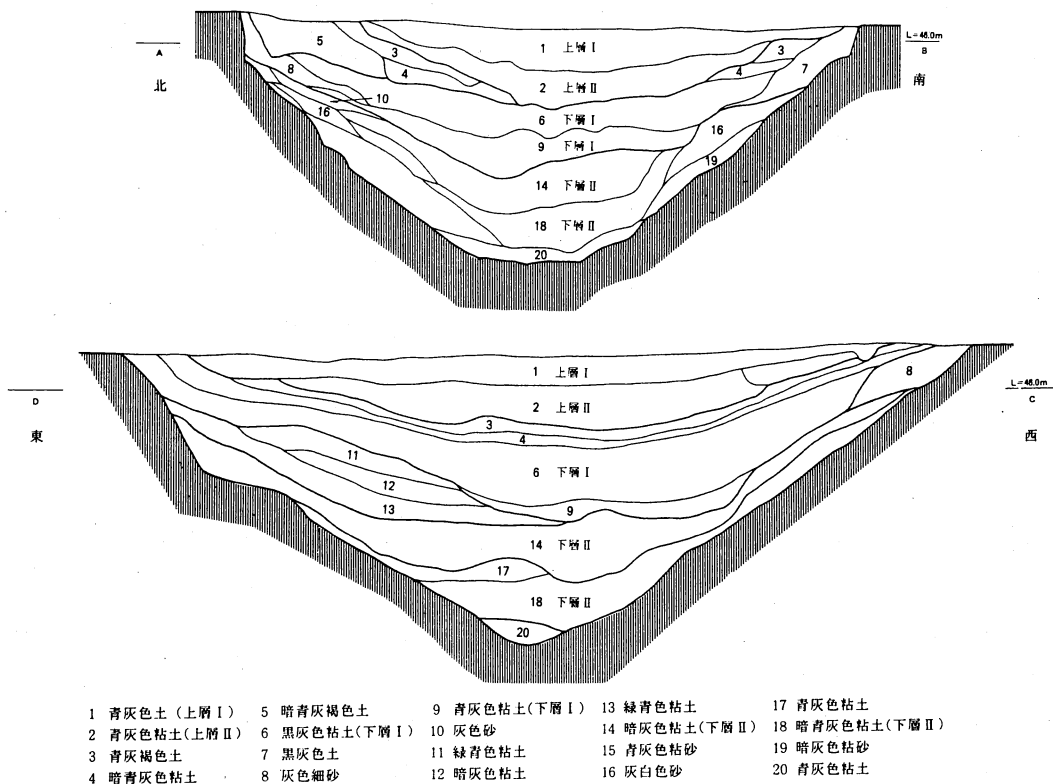


図45 十六面・薬王寺遺跡北Ⅱ調査区検出の屋敷区画濠土層断面図（S：1／50）

まとめ

以上のように、わずか数例の遺跡ではあるが、紹介してきた。これらの遺跡は発掘調査によって明らかになったもののごく一部であり、紹介すべき遺跡はまだたくさんある。

この項の最初で述べたように、これまで文献資料によって埋めることのできなかった数多くの事実が、考古学的検証によって明らかにされつつある。特に、環濠集落形成以前の環濠屋敷の姿、あるいはさらにそれ以前の村の姿は、これまであまり明らかにはなっていなかったものである。ここに紹介したものでは不十分ではあるが、考古学的調査による成果の一端をうかがい知ることができるだろう。そして、これからも、まだ数多くの知見をもたらしてくれるだろう。

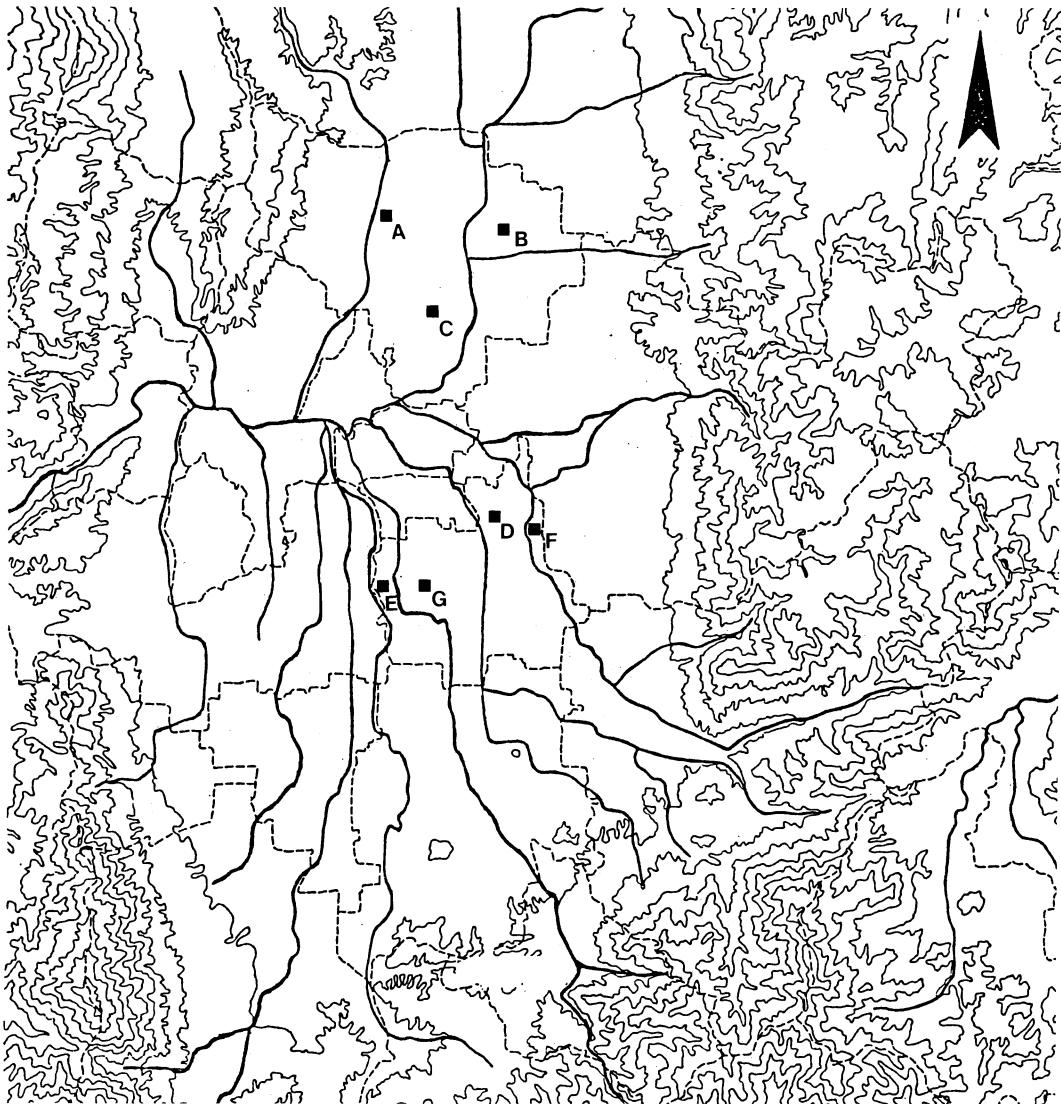


図46 発掘された環濠分布図

3. 大和郡山市域に残る環濠集落

奈良盆地に数多くの環濠集落が存在した、あるいは現在も存在していることは、すでに先学諸氏の調査研究によって明らかであり、また、その実数についても既に述べた。これらの多くが、田原本町から大和川の合流地域に多く、一般的に盆地南部の方が多いこと、さらにその分布が海拔100m以下にあることは、すでに堀井甚一郎氏の述べられているところであるが、大和郡山市は北和地域において最も環濠集落の存在が顕著なところである。村田修三氏によれば、大和郡山市域には34カ所の環濠集落が所在するとされている（文献31）。これは氏の上げられた、奈良県下の各氏町村の中で田原本町・橿原市等に次いで多い数である。

しかし、その反面、稗田、若槻の環濠集落に代表される著名な環濠集落の存在によって、その他のものについては以外と知られていない。無論、この2つの環濠集落は、完全に環濠が残されている点において特筆すべきものではあるが、以外にも一部環濠の遺存しているものもあり、これらはいつ消滅するかわからない状況にあり、これらについて現状を報告しておくことも決して無駄ではないだろう。

以上のような動機から大和郡山市域の集落について実地調査を行い、その痕跡の認められるものについてこの項でとりあげた。なにぶん、環濠集落などの地理的領分のものについては門外漢であることから重大な錯誤を犯しているかもしれないがご容赦願いたい。



写真32 稗田環濠の遠景

a. 天井環濠集落

天井環濠は、かつて野村傳四氏が汽車の車窓から紹介している。「郡山驛を出ると間もなく、大軌の南北線（※今の近鉄樫原線）が目に入る。この線の少し手前で郡山町の南部に接した一部落が汽車の窓近くに見える。部落の北方には藪が続いて居るが、この藪に沿って東西に濠がある。と思ふと、この濠は部落の東端で南に折れる。而してこの南に折れた濠が更に西に折れるか如何か、明瞭に見極めがつかぬうちに汽車は部落を遠く離れるのだ。」南と西の濠は今はコンクリートで護岸されたが、今でもこの記述と同じような風景が車窓からうかがえる。（参考文献 19）



写真38 北西角にある常夜燈



写真39 天井町の家並み



図47 現在の天井環濠（S：1／2,500黒塗は濠の残る部分）



写真40 集落北東側の濠(1)



写真41 集落北東側の濠(2)



写真42 集落北側の濠

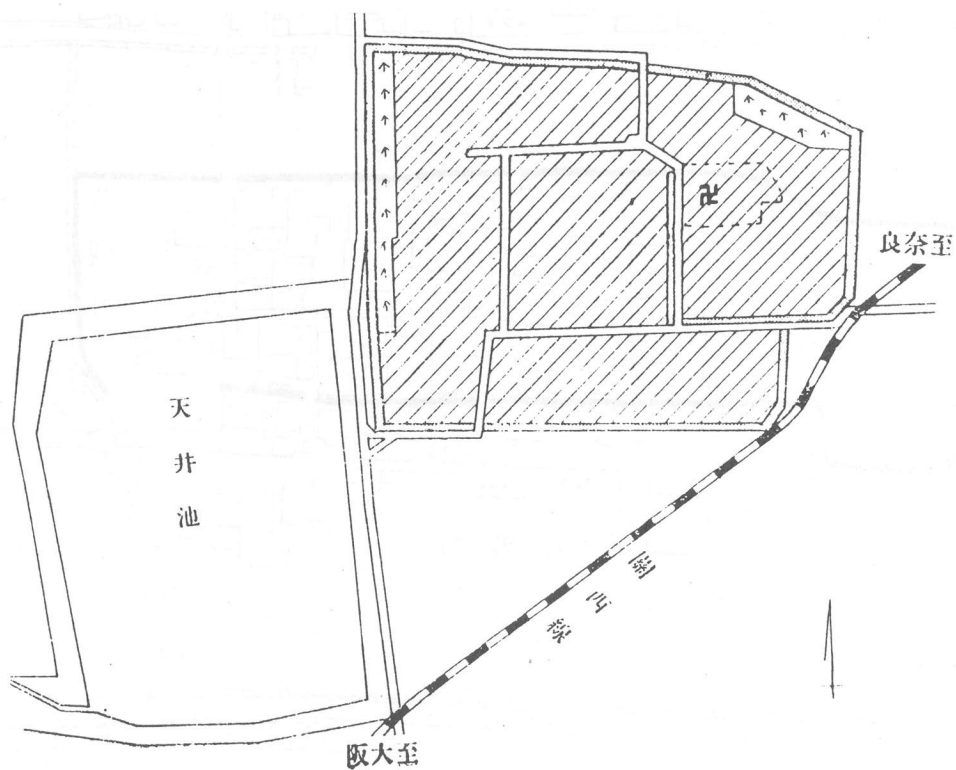


図48 昭和初期の天井環濠（文献19より引用）

b. 若槻環濠集落

若槻の環濠集落は数多くの研究者によって取り上げられ、その稗田環濠集落とともに最も著名な環濠集落といえる。この環濠集落が著名となった理由は、環濠がほぼ完全に遺存していることもあるが、



写真43 集落北側の濠

るが、渡辺澄夫氏や金田章裕氏の詳細な研究によって、環濠集落形成以前の散村形態が復元され、環濠の形態が整うまでの変遷、そして環濠形成の時期がほぼ断定できるからである。

環濠形成の時期は、文正元年(1466)以前とされる。

現在の若槻環濠集落では、特に西辺の天満宮・観音堂の面するところが、土居などの施設がよく残って居

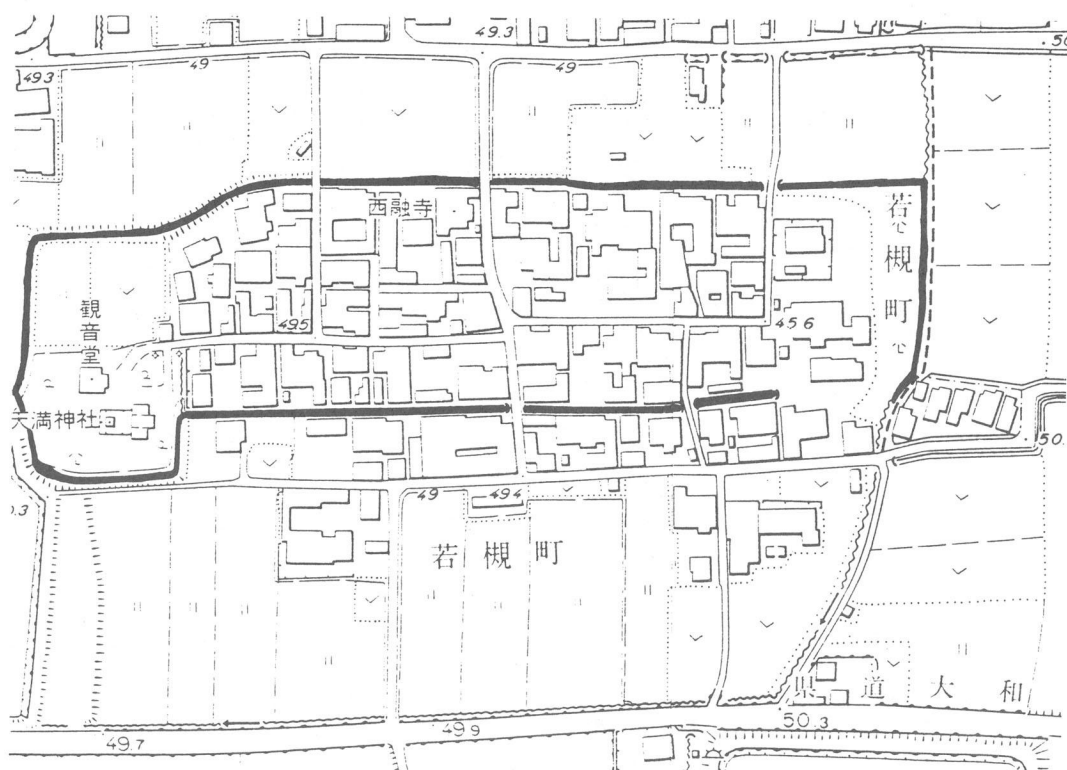


図49 現在の若槻環濠 (S: 1/2,500黒塗りは濠の残る部分)

る。おそらくこの地域が、防御拠点となったものと推定されている。『和州十五郡衆徒国民郷土記』や『大乘院寺社雑事記』にも「若槻平城」や「若槻塁」の記載がある。

また、天保六年（1835）の地図がいまでも残されている。（参考文献 8、9、12、25、31、34）

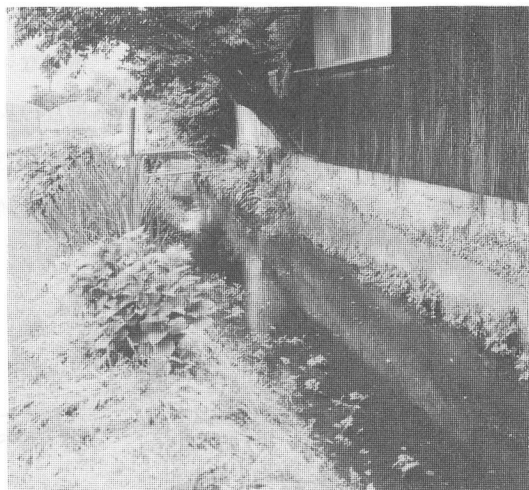


写真44 集落北西側の壕(1)



写真45 集落北西側の壕(2)



図50 天保六年（1835）の若槻環壕集落（文献8より引用）

c. 井戸野環濠集落

井戸野は南に菩提仙川と接し、L字型を呈する集落である。この集落は、環濠集落研究に先鞭をつけた、小川琢治、牧野信之助両氏に取り上げられ、戦前に調査された環濠として、学史上非常に貴重な環濠集落である。当時の姿は、牧野氏の解説によると八幡神社を中心として北、東、西に濠を巡らせ、また、西南部を別の区画に分け、二重の環濠となっていた。氏はこの部分が城の本丸に相当する施設として機能したと考えられた。

現在では、当時のままに残っているのは北辺と東辺北半のみで、東辺南半は消滅してしまった。西辺はコンクリートによって護岸されているが、濠としての存在を今に伝える。また、二重になった内側の濠は、排水溝にその面影をとどめている。現在も昔のままである東辺北半は八幡神社の東から北の部分が遺存しているが、濠の幅はかなり縮小している。神社東の部分は既に水もなく注意しないと濠であることを見落としてしまう。神社北の濠についても水量は少なく辛うじて濠の痕跡をのこすのみである。(参考文献 8、29)

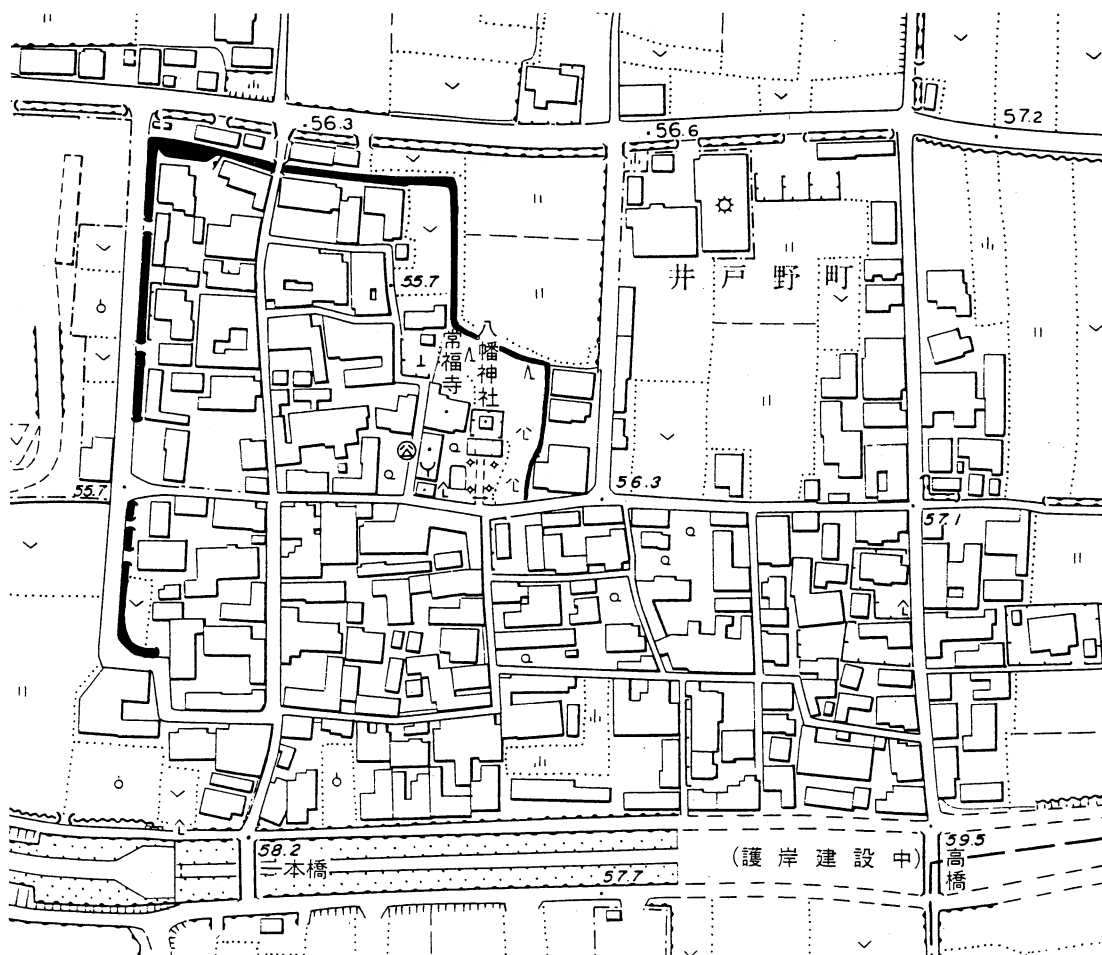


図51 現在の井戸野環濠 (S: 1/2,500黒塗は濠の残る部分)



写真46 集落北東側の濠



写真47 集落北西隅の濠



写真48 集落北側の濠

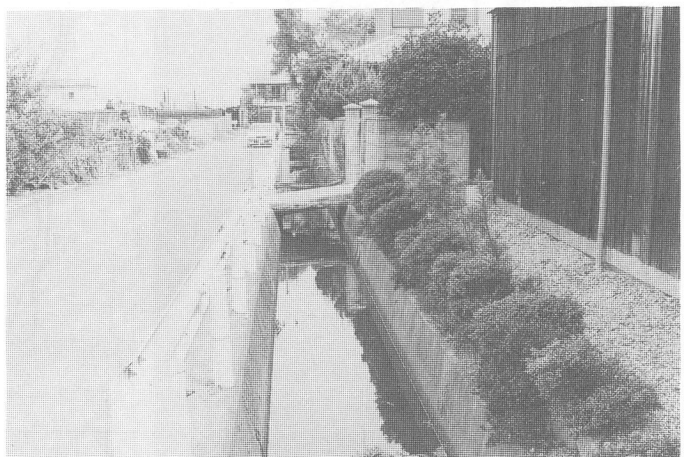


写真49 集落西側の濠

d. 番条城

番条は大乗院衆徒として、この地に勢力のあった番条氏の根拠地となり、城塞的發展を遂げた環濠集落である。『大乗院寺社雑事記』によると長祿三年（1459）に筒井氏に攻められた際、番条の濠で数知れずの郷民が溺死したとの記載があり、この時期には環濠をもった集落の存在したことが確認できる。番条氏は応仁の乱ののち一時筒井方に属したが、明応六年（1497）、再び筒井氏と争い、以後、筒井氏に服するようになったようである。

番条城形成の変遷については、詳細に検討されており、最初の段階において北端に環濠屋敷が、南端に塊村がそれぞれ形成されたと考えられている。このあと、北側はさらに城塞化が進み、また、番条一族に戌亥殿、辰巳殿と文献に見られることから、城館地域の拡大がなされたようである。一方、南側でも番条氏の勢力拡大とともに、集村化と環濠の形成がなされ、現在の様になったと推定されている。

現在は、集落北側と東側の濠がよく残っており、特に東側は当時のままであると考えられる。また、支濠も部分的ではあるが、残されている。集落西側については部分的にわずかにその痕跡を残すのみとなっている。（参考文献 2、11、25、29、31）



写真50 昭和38年の番条

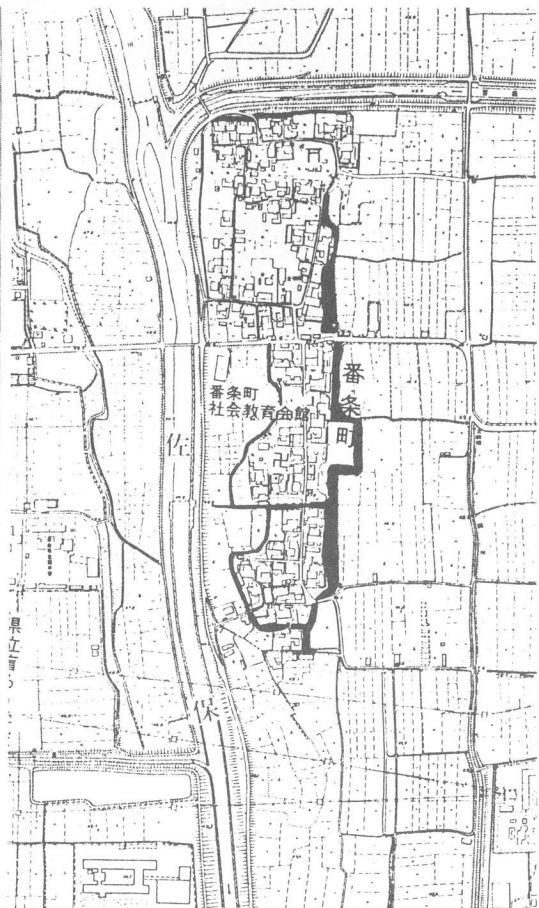


図52 現在の番条 (S: 1/10,000)
(黒塗は濠の残る部分)



写真51 集落北側の濠



写真52 集落東側の濠

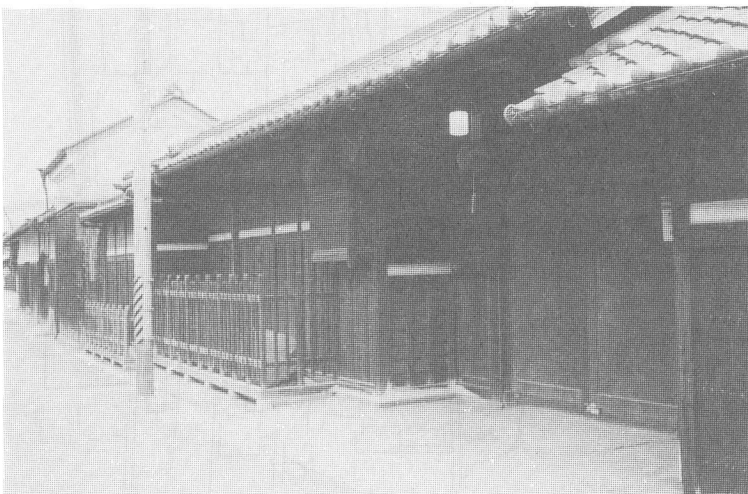


写真53 番条の家並み

e. 発志院・中城環濠集落

番条の集落より約500m東に存在する発志院・中城の集落は東北隅を欠く鍵形を呈している。環濠は、ほぼ全周が残っているが、大半はコンクリートや石垣によって護岸されており、昔のままの



写真54 集落北西側の濠



写真55 集落西側の濠

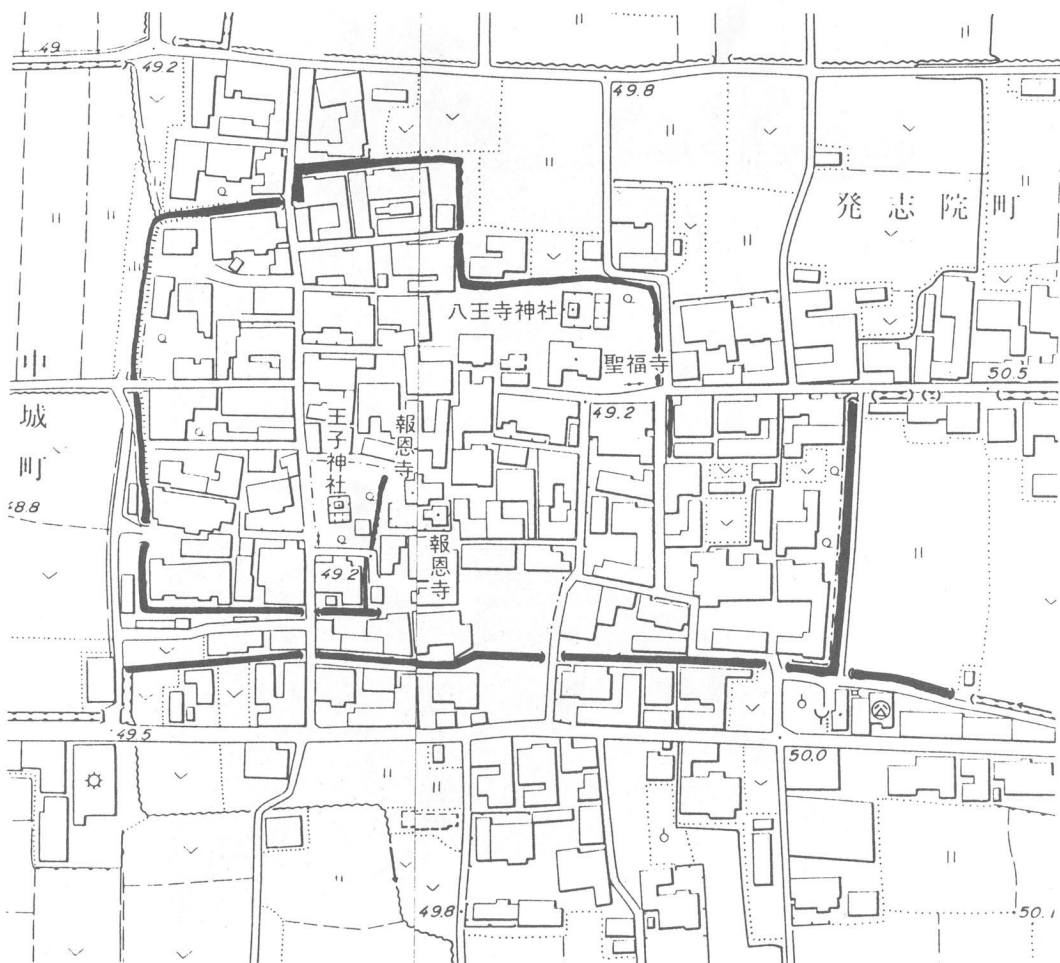


図53 現在の発志院・中城環濠 (S: 1/2,500黒塗は濠の残る部分)

部分は中城町側の西辺南半分ぐらいである。コンクリートによって護岸された北西部分は、現在は幅30cmほどの溝となっているが、かつての濠の肩部分までコンクリートによって固められているため、以前の濠の幅員が推定できる。また、南東隅の濠は石垣によってきれいに護岸され、落ち着いた雰囲気醸しだしている。

(参考文献 8)



写真56 集落南東隅の濠



写真57 集落南、東側の濠



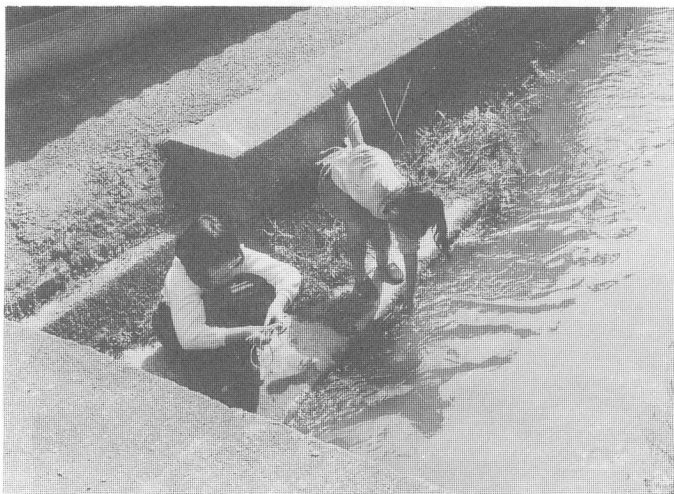
写真58 集落南側の濠(1)

写真59 集落南側の濠(2)

f. 北西環濠集落

北西の集落は、大和郡山市のほぼ中央部に位置する。環濠はすでにすべてコンクリートにより護岸され、往時の姿をとどめる部分は残っていない。しかし、生活の中に息づいていた、かつての環濠の姿がここにはまだ残されている。

濠は、北から流れる灌漑用水を集落北端で東西に分け、集落の東西をそれぞれ南流させている。



西側の濠は、道沿いに、ほぼ直線状に南下し集落外へぬけていくようになってしまっているが、東側の濠は、現在でも、かつての集落の縁辺部を流れ、また、洗い場の跡が残されていて、こどもたちの恰好の遊び場となっている。

北西の集落では今でも濠が生活の一部となっていることを感じさせる。

写真60 濠で遊ぶ子供たち

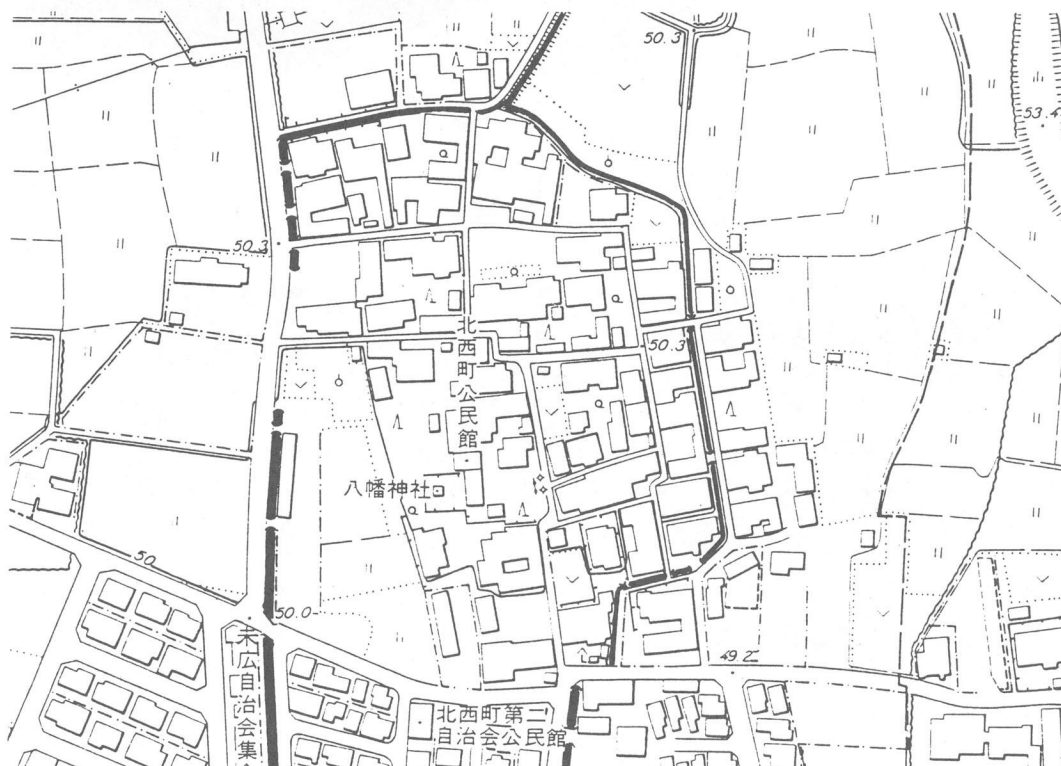


図54 現在の北西環濠 (S: 1/2,500 黒塗は濠の残る部分)



写真61 集落北側の状況

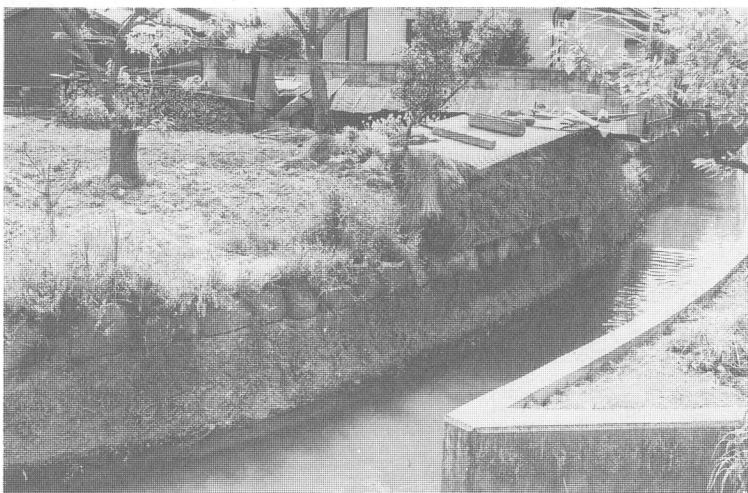


写真62 集落北東側の濠



写真63 集落東側の濠

8. 筒井城

大和一国を統一した筒井氏の居城として、著名であるこの筒井城も今では、集落の北側と菅田比
 売神社の東側に濠の痕跡を残すのみである。しかし、昭和38年に撮影された航空写真には、水田に
 はっきりとかつて濠の痕跡を残している。現在は、この水田も徐々にその姿を消しつつあるが、ま



写真64 昭和38年の筒井城ステレオ空中写真（立体視すると濠跡の水田がまわりより低いことがわかる）



図55 現在の筒井城跡（S：1／5,000黒塗は濠の残る部分）

だ、そのあとを認めることはできる。

筒井氏及び筒井城についての史料は、数多く残されており、そのすべてをここで紹介することはできないが、筒井城の初見は『満濟准后日記』の永享元年（1429）の項である。筒井城は筒井氏の盛衰と共に発展と落城を繰り返す。そして最終的には筒井氏の大和統一によって、天正七年（1579）に大修築が行われたが、翌年、織田信長の「大和一国破城命令」によって廃城の途をたどることとなるのである。（参考文献 10、15、18、29、31）



写真65 菅田比売神社



写真66 神社東側の濠



写真67 集落北側の濠(1)



写真68 集落北側の濠(2)

おわりに

奈良盆地には、かつて数多くの環濠集落が存在した。現在でも一部であれ、その面影を残す集落はたくさん残されているだろう。各氏町村で発行しているその町の地図を広げると、そこかしこに濠のあることがよくわかる。濠は奈良盆地のひとつの風景になってしまっているのかもしれない。

だが、これらの濠はその使命をほとんど終えてしまい、今やその多くが消滅し、あるいは消滅しかかっているのである。時代の移り変わりの中で、景観が変化して行くのはある意味でしかたのないことだろう。より生活に即した形でまわりの環境を改変することは、人類の活動そして歴史そのものであり、現在の我々の生活もそうした歴史のうえに立脚しているのである。だから、これらの濠を埋めて駐車場を作り、道幅を広げることも濠にとっては当然の運命といえるだろう。しかし、ここでもう一度これらの濠を埋めてしまう前に、思い出してほしい。そこには、その村の歴史、奈良の歴史、そして日本の歴史を沈黙の中で物語る非常に身近な証人のいることを。

歴史的景観ということばもきかれて久しい。日本人は働き過ぎ、もっと心にゆとりを、の掛声も既に耳慣れてしまった。環濠とは歴史的景観を構成する貴重な文化遺産であるとともに、奈良を故郷とするものにとっては、懐かしい風景、自分史のなかのかけがえのない遺産であること忘れないでいてほしい。

参考文献

1. 石田貞雄・岡田英男『中家の魅力』向陽書房 1988年
2. 市川秀之「環濠集落の成立に関する一考察」『史泉』65 関西大学史学・地理学会 1987年
3. 伊藤勇輔「筒井城跡」『奈良県遺跡調査概報』1982年 第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所編 1983年
4. 今尾文昭「法貴寺遺跡」『季刊自然と文化』30 観光資源保護財団 1990年
5. 今尾文昭・田中一広「法貴寺遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1986年度 第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所編 1989年
6. 太田三喜「中世末期における居館の様相」『天理大学学報』157 天理大学学術研究会 1988年
7. 亀井伸雄「今井町形成史論」『研究論集』Ⅷ 奈良国立文化財研究所学報 第47冊 1989年
8. 喜多芳之『大和の環濠集落』日本古城友の会研究紀要Ⅱ 1976年
9. 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂 1985年
10. 桑原公徳「中世城館の分布と形態及び規模」『信濃』31-12 信濃史学会 1979年
11. 桑原公徳「中世城館の歴史地理学的研究」『歴史地理学プロシーディングス』古今書院
12. 桑原公徳「環濠集落」『歴史がつくった景観』古今書院 1982年
13. 谷岡武雄「環濠集落」『奈良盆地』奈良女子大学地理学教室 1961年
14. 天理市史編纂委員会『改訂天理市史』下巻 天理市 1976年
15. 徳永光俊「水と村・中世から近世へ」『治水の地域史』地域史研究会 1985年
16. 中井一夫「若槻庄関連遺跡第3次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度 第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所編 1983年
17. 奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』1981年
18. 野崎清孝「大和の城館」『講座考古地理学』3 学生社 1985年
19. 野村傳四『大和の垣内』天理時報社 1943年
20. 濱口芳郎『古屋敷遺跡第3次発掘調査概要報告』大和郡山市文化財調査概要22 1991年
21. 藤岡謙二郎『日本歴史地理学序説』塙書房 1962年
22. 藤田三郎「奈良盆地における中世城館と近世集落について」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ 1985年
23. 藤田三郎『昭和60年度 唐古・鍵遺跡 第22・24・25次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要4 1986年
24. 藤田三郎『金剛寺遺跡発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要10 1988年
25. 保存修景計画研究会「下ッ道と環濠集落」『環境文化』45 環境文化研究所 1980年
26. 堀井甚一郎『最新奈良県地誌』大和史蹟研究会 1962年
27. 堀内義隆「環濠集落について」『田原本の歴史』1 田原本町 1983年
28. 堀部日出男「大和環濠聚落の史的研究」『考古学論攷』第1冊 奈良県教育委員会 1951年
29. 牧野信之助『土地及び聚落史上の諸問題』アリス館牧新社 1976年
30. 松本洋明『十六面・薬王寺遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告54 1988年
31. 村田修三他『日本城郭大系』10 三重・奈良・和歌山 新人物往来社 1980年
32. 山川均「筒井城第2次」大和郡山市文化財調査概要11 1988年
33. 山川均「筒井城第3次森目地区発掘調査概報」大和郡山市文化財調査概要20 1991年
34. 渡辺澄夫『増訂 畿内荘園の基礎構造』吉川弘文館 1969年